



下 渕 名 遺 跡

社会資本総合整備(防災・安全)(一)伊勢崎新田上江田線
(大國神社東交差点)交差点改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2018

群 馬 県 伊 勢 崎 土 木 事 務 所
公 益 財 団 法 人 群 馬 県 埋 蔵 文 化 財 調 査 事 業 団

下 洩 名 遺 跡

社会資本総合整備(防災・安全)(一)伊勢崎新田上江田線
(大國神社東交差点)交差点改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2018

群 馬 県 伊 勢 崎 土 木 事 務 所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

群馬県が策定した「はばたけ群馬・県土整備プラン」は、群馬が未来に向けて大きくはばたいていくための本県の県土整備分野の最上位計画で、その基本的な柱の一つである「安心して暮らせる地域づくり」のための施策の一つとして、歩行者や自転車の安全な通行を確保するための「交通事故防止対策」に基づいて、一般県道伊勢崎新田上江田線大國神社交差点改良事業が行われることになりました。

工事対象範囲は、周知の埋蔵文化財包蔵地である下湖名遺跡群の一角に当たっているため、埋蔵文化財の取り扱いについて関係機関によって協議・調整が図られ、埋蔵文化財の記録保存の措置が取られることとなり、平成29年度に発掘調査、平成30年度に整理事業が当事業団に委託され、このほど、発掘調査報告書刊行の運びとなりました。

周辺一帯は、古代の上野国佐位郡澗名郷、中世の荘園である澗名荘の故地と考えられており、調査地点は、延喜式内社である大國神社に近接する場所であります。これまでも、上武道路の建設をはじめ各種の開発行為に先立って古墳群や古墳時代前期から奈良・平安時代にかけての大集落、中世方形居館の堀制や区画溝などの多くの遺構が調査されており、古代澗名郷や中世澗名荘の実態が次第に明らかになってまいりました。

今回の発掘調査でも、古代澗名郷の一角と考えられる古代の集落の一部が発見されており、古代澗名郷の実態の解明にむけて、さらなる資料を加えることが出来ました。

発掘調査から報告書の刊行に至るまでには、群馬県県土整備部、群馬県伊勢崎土木事務所、群馬県教育委員会、伊勢崎市教育委員会、地元関係者等の皆様方に多大なるご指導・ご支援とご協力を賜りました。ここに篤く御礼を申し上げますとともに、本書が地域における歴史の解明や、文化財の保存・活用、地域文化の振興に広く役立てられますことを願ひまして、序といたします。

平成30年10月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 中野三智男

例 言

1. 本書は、平成29年度社会資本総合整備(防災・安全) (一)伊勢崎新田上江田線(大國神社東交差点)交差点改良事業に伴い発掘調査された下湖名遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡は、群馬県伊勢崎市境下湖名字塚越3047-1に所在する。
3. 事業主体は群馬県伊勢崎土木事務所である。
4. 調査主体は公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団である。
5. 発掘調査の期間と体制は次のとおりである。

履行期間：平成29年5月15日～平成29年8月31日

調査期間：平成29年6月1日～平成29年6月30日

調査担当：石田真(主任調査研究員)

遺跡掘削工事請負：スナガ環境測設株式会社

地上測量委託：技研コンサル株式会社

6. 整理事業の期間と体制は次のとおりである。

履行期間：平成30年6月1日～平成30年10月31日

整理期間：平成30年6月1日～平成30年8月31日

整理担当：大西雅広(専門調査役、平成30年6月1日～平成30年6月30日)

高島英之(専門員(総括)、平成30年7月1日～平成30年8月31日)

7. 本書作成担当は次のとおりである。

編集 高島英之・大西雅広

本文執筆 高島英之

遺物観察・遺物写真撮影

石器・石製品 : 津島秀章(資料2課長)

土器・陶磁器 : 大西雅広(専門調査役)

金属製品 : 板垣泰之(専門員)・関 邦一(専門調査役)

デジタル編集 : 齊田智彦(資料統括・主任調査研究員)

8. 石材同定は飯島静男氏(群馬地質研究会)に依頼した。
9. 出土遺物および写真・図面等記録類は群馬県埋蔵文化財調査センターに保管している。
10. 「湖名」の地名表記には「湖名」と記すものと「湖名」と記すものが混在する。歴史用語としては「湖名」の表記を用い、地名、遺跡名については、伊勢崎市の地名表記、当該遺跡発掘調査報告書の表記に拠った。
11. 発掘調査および報告書作成には、次の関係機関、諸氏にご助言をいただいた。
群馬県教育委員会、伊勢崎市教育委員会

凡 例

1. 本報告書に用いた遺構名称は、発掘調査時の名称を踏襲した。
2. 本報告書に用いた座標・方位は、すべて国家座標第IX系(世界測地系)による。主軸方位等の計算にもこれを用いた。
3. 本報告書の遺構図版縮尺は以下の通り。

遺構平面図・断面図	竪穴建物・溝1/20、土坑・ピット1/40
調査区壁断面図	1/40
4. 本報告書の遺物図版縮尺は以下の通り。ただし、遺物によってはこの限りではない。

弥生土器	1/3、銭貨	1/1、石製品	1/3・1/4
------	--------	---------	---------
5. 本報告書中の遺構断面図の標高値は、原則として断面図上に「L=○○m」のように表記した。
6. 本報告書における土層断面図及び遺物観察表に記した色調表現は、農林水産省水産技術事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帳』1988によった。
7. 本報告書におけるテフラ(火山噴出物)の略号は以下の通りである。テフラ名称は町田洋・新井房夫『火山灰アトラス』東京大学出版会 1992によった。

As-A	…浅間 A、As-Kk	…浅間粕川、As-B	…浅間 B、Hr-FA	…榛名二ツ岳渋川
------	-------------	------------	-------------	----------

目次

序	4.古墳時代	14
例言	5.奈良・平安時代	15
凡例	6.中世	17
目次	7.近世	18
挿図・表・写真図版目次	第3節 基本土層	19
第1章 調査に至る経緯、方法と経過	第3章 検出された遺構と遺物	20
第1節 調査に至る経緯	はじめに	20
第2節 下測名遺跡群発掘調査の変遷	第1節 竪穴建物	22
1.明神遺跡(下測名No.1・2・5地点)	第2節 溝	24
2.下測名遺跡No.3地点	第3節 土坑	25
3.寺家前遺跡(下測名No.4地点)	第4節 ビット	33
4.下測名SA・SB遺跡(下測名No.6地点)	第5節 遺構外出土遺物・非掲載出土遺物	41
5.笠遺跡(下測名No.7地点)	第6節 旧石器確認調査	42
6.下測名・本郷遺跡(下測名No.8地点)	第4章 調査成果の整理とまとめ	44
7.下測名・堀込遺跡(下測名No.9地点)	遺物観察表・非掲載遺物一覧表	
8.上測名・下境遺跡(下測名No.10地点)	写真図版	
9.下測名・高田遺跡(下測名No.11地点)	報告書抄録	
10.下測名遺跡No.12地点		
11.下測名遺跡No.13地点		
12.下測名塚越遺跡		
第3節 発掘調査の経過		
第4節 発掘調査の方法		
1.座標の設定		
2.調査の方法		
3.遺構測量		
4.遺構写真撮影		
第5節 整理作業の経過と方法		
第2章 周辺の環境		
第1節 地理的環境		
第2節 歴史的環境		
1.旧石器時代		
2.縄文時代		
3.弥生時代		

挿図目次

第1図	遺跡の位置(1/200,000)	2	第12図	6号土坑出土遺物(1)	29
第2図	遺跡の位置(1/50,000)	2	第13図	6号土坑出土遺物(2)	30
第3図	下河名遺跡群調査位置図	3	第14図	7～9・13・15号土坑	30
第4図	周辺地形分類図	10	第15図	10・12・14号土坑	31
第5図	遺跡位置図及び周辺遺跡分布図	11	第16図	1～8・12・27号ピット	39
第6図	基本土層模式図	19	第17図	9～11・13～17・19～22号ピット	40
第7図	下河名遺跡調査区全体図	21	第18図	23～26号ピット	41
第8図	1号型穴建物	22	第19図	遺構外出土遺物	41
第9図	2号型穴建物	23	第20図	旧石器確認調査トレンチ位置図、土層断面図	43
第10図	1号溝	24			
第11図	1～6号土坑	28			

付図 下河名遺跡 一般県道伊勢崎新田上江田線(大槻神社東交差点)交差点改良事業に伴う発掘調査区全体図

表目次

第1表	下河名遺跡群調査一覧表	4	第4表	遺物観察表	47
第2表	周辺遺跡一覧表	12	第5表	非規範遺物一覧表	47
第3表	検出土構数一覧表	20			

写真目次

PL. 1	1.一般県道伊勢崎新田上江田線大槻神社東交差点の現況(東より)	7. 5・6号土坑全景(西より)	
	2.調査区全景(北より)	8. 6号土坑全景(北より)	
PL. 2	1.調査区全景(西より)	PL. 7	1. 6号土坑石製品等出土状況1(北西より)
	2.調査区東半部遺構検出状況(西より)		2. 6号土坑石製品等出土状況2(南より)
PL. 3	1.調査区西半部遺構検出状況(東より)		3. 6号土坑掘り方全景(南より)
	2.調査区東端部遺構検出状況(北より)		4. 6号土坑土層断面A-A'(北より)
	3.調査区東半部遺構検出状況(北より)		5. 7号土坑全景(北より)
	4.調査区中央部遺構検出状況(北より)		6. 7号土坑土層断面A-A'(北より)
	5.調査区西端部遺構検出状況(北より)		7. 7号土坑角閃石安山岩礫出土状況(北より)
PL. 4	1. 1号型穴建物全景(西より)	8. 7号土坑出土角閃石安山岩礫	
	2. 1号型穴建物全景(北西より)	PL. 8	1. 8号土坑全景(西より)
	3. 1号型穴建物土層断面A-A'(西より)		2. 8号土坑土層断面A-A'(南より)
	4. 2号型穴建物全景(北より)		3. 9号土坑全景・土層断面A-A'・16・17号ピット全景(北より)
	5. 2号型穴建物全景(西より)		4. 10号土坑全景(南東より)
	6. 2号型穴建物土層断面A-A'(北より)		5. 10号土坑土層断面A-A'(北東より)
	7. 2号型穴建物土層断面B-B'(東より)		6. 10号土坑掘り方全景(北西より)
	8. 2号型穴建物掘り方全景(北東より)		7. 11号土坑全景(北より)
PL. 5	1. 2号型穴建物掘り方全景(西より)		8. 11号土坑土層断面A-A'(北より)
	2. 1号溝全景(北より)	PL. 9	1. 12号土坑全景(北西より)
	3. 1号溝全景(西より)		2. 12号土坑土層断面A-A'(北より)
	4. 1号溝土層断面A-A'(北より)		3. 13号土坑全景(南より)
	5. 1号土坑、25号ピット全景(西より)		4. 13号土坑土層断面B-B'(北西より)
	6. 1号土坑、25号ピット土層断面A-A'(南西より)		5. 14号土坑全景・炭化材出土状況(南より)
	7. 2号土坑全景(北西より)		6. 14号土坑炭化材出土状況(南より)
	8. 2号土坑土層断面A-A'(北東より)		7. 14号土坑土層断面A-A'(南より)
PL. 6	1. 3号土坑全景(北より)		8. 14号土坑掘り方全景(南より)
	2. 3号土坑土層断面A-A'(北より)	PL. 10	1. 15号土坑全景(南より)
	3. 4号土坑全景(南より)		2. 14・15号土坑土層断面A-A'(南東より)
	4. 4号土坑土層断面A-A'(南より)		3. 1号ピット全景・土層断面A-A'(南より)
	5. 5号土坑全景(南より)		4. 1号ピット検出状況(南より)
	6. 5号土坑土層断面A-A'(南より)		5. 2・27号ピット全景(北より)

6. 2号ピット土層断面A-A'(北より)
7. 3号ピット全景(北より)
8. 3号ピット土層断面A-A'(北より)
- PL.11 1. 4号ピット全景(北より)
2. 4号ピット土層断面A-A'(北より)
3. 5号ピット全景(北より)
4. 5号ピット土層断面B-B'(北より)
5. 6号ピット全景(北より)
6. 6号ピット土層断面A-A'(北より)
7. 6号ピット掘り方全景(北より)
8. 6号ピット銅銭出土状況(北より)
- PL.12 1. 7号ピット全景(北より)
2. 7号ピット土層断面A-A'(北より)
3. 7・8号ピット全景(北より)
4. 8号ピット全景(北より)
5. 8号ピット土層断面B-B'(北より)
6. 9号ピット全景(南より)
7. 9号ピット土層断面A-A'(南より)
8. 10・11号ピット全景(北西より)
- PL.13 1. 10号ピット土層断面A-A'(南より)
2. 10・11号ピット土層断面B-B'(西より)
3. 12号ピット全景(北より)
4. 13~15・19・20号ピット全景(北より)
5. 13号ピット北側部分全景(南より)
6. 15号ピット全景(北より)
7. 13~15号ピット土層断面A-A'(北より)
8. 13号ピット北側部分土層断面B-B'(南より)
- PL.14 1. 19・20号ピット全景(北より)
2. 19・20号ピット土層断面A-A'(北より)
3. 21・22号ピット全景(北より)
4. 21号ピット全景(北より)
5. 21号ピット土層断面A-A'(北より)
6. 22号ピット全景(北より)
7. 22号ピット土層断面B-B'(北より)
8. 23・24号ピット全景(北より)
- PL.15 1. 23号ピット土層断面B-B'(南より)
2. 24号ピット土層断面A-A'(南より)
3. 26号ピット全景・土層断面A-A'(北より)
4. 27号ピット土層断面A-A'(北より)
5. 調査区西壁土層断面A-A'(東より)
- PL.16 1. 旧石器確認調査1号トレンチ全景(東より)
2. 旧石器確認調査1号トレンチ東側全景(南より)
3. 旧石器確認調査1号トレンチ西側全景(南より)
4. 旧石器確認調査1号トレンチ東側土層断面A-A'(南より)
5. 旧石器確認調査2号トレンチ全景(東より)
6. 旧石器確認調査2号トレンチ土層断面B-B'(南より)
7. 旧石器確認調査3号トレンチ全景(東より)
8. 旧石器確認調査3号トレンチ土層断面C-C'(南より)
- PL.17 6号土坑・6号ピット・遺構外出土遺物

第1章 調査に至る経緯、方法と経過

第1節 調査に至る経緯

群馬県が策定した「はばたけ群馬・県土整備プラン」は、群馬が未来に向けて大きくはばたいていくために、道路や河川・砂防施設、県立公園、下水道、県営住宅など、ぐんまの社会資本の整備や維持管理を、「どのような考え方で、どのように進めていくか」を示す本県の県土整備分野の最上位計画である。この計画は、県土整備プランに掲げる将来像の実現に向けて、4つの基本目標(元氣・安全・魅力・環境)に位置づけた政策を計画的に実施することにより、県民の命と暮らしを守り、活力ある地域経済を支えるとともに、誰もが豊かに暮らせる、緑豊かで自然にあふれた県土づくりを目指すものである。

この政策の基本的な柱の一つである「安心して暮らせる地域づくり」のための施策の一つとして、歩行者や自転車の安全な通行を確保するための「交通事故防止対策」に基づいて、一般県道伊勢崎新田上江田線大國神社東交差点改良事業が行われることになった。工事対象地は、縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世の各時代に関する埋蔵文化財包蔵地・伊勢崎市遺跡番号SA036下瀧名遺跡群として伊勢崎市の遺跡台帳に登録されている範囲内に当たっている。

対象地における文化財の取り扱いについては、まず、平成27(2015)年5月8日付け建企第66-5号にて、工事を監理する群馬県県土整備部建設企画課から群馬県教育委員会事務局文化財保護課に対して、当該区間における埋蔵文化財の状況について照会がなされた。これを受けた群馬県教育委員会事務局文化財保護課では、同年6月8日、工事対象箇所が周知の埋蔵文化財包蔵地範囲内に当たっており、工事対象箇所にかなる遺構が存在するかを明らかにするため埋蔵文化財の試掘調査が必要である旨を通知し、試掘調査と文化財保護法94条による届出の提出の必要性について、同年6月26日付け文財第3004-17号によって文書で正式に回答している。

翌平成28(2016)年3月8日付け伊土第422-1号にて、

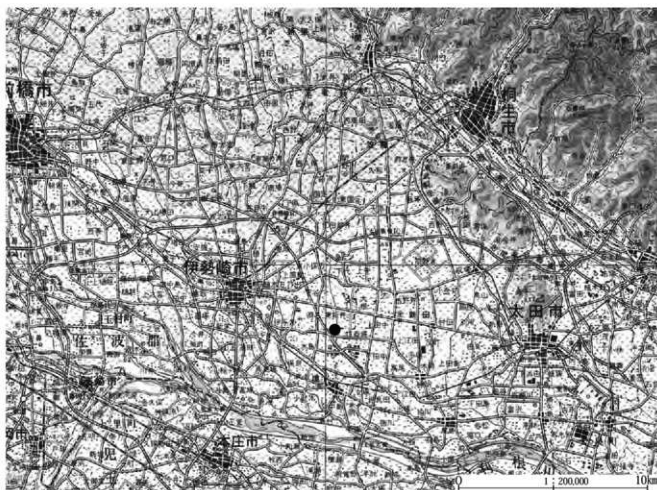
群馬県伊勢崎土木事務所長から県教育委員会事務局文化財保護課長にあてて、当該地における埋蔵文化財試掘調査依頼書が提出され、それを承けて群馬県教育委員会事務局文化財保護課は、同日14日、遺構検出面の認定及び遺構・遺物の有無の確認を行うとともに、調査期間や経費を算定する上での根拠を得ることを目的とした埋蔵文化財試掘調査を当該地において実施した。工事対象範囲内に長さ37m・幅1mの試掘坑を設定し、0.2㎡のバックホウを用いて掘削を行った結果、地表面から約0.9～1m掘り下げた地点において黄褐色ローム層を検出し、ローム層を掘り込んで造られた古代の土坑・ピットや時期不明の掘り込みなどの遺構と古代の土師器片の出土を確認した。そのため、事業対象地では工事に先立って、発掘調査による埋蔵文化財記録保存の措置が必要であるとの判断に至り、その結果は、試掘調査実施の翌々日の同年3月16日付け伊勢崎土木事務所長宛文書で通知された。

群馬県教育委員会事務局文化財保護課の調整のもと、群馬県伊勢崎土木事務所を委託者、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団を受託者として、平成29(2017)年5月1日付当該地における発掘調査の委託契約が締結され、同年6月1日から着手されることになった。

なお、群馬県伊勢崎土木事務所は、同日付け伊土第448-5号にて、伊勢崎市教育委員会事務局文化財保護課に文化財保護法第94条による届け出及び添付書類を提出し、これを受領した伊勢崎市教育委員会事務局文化財保護課は同日付け伊教文第141-2号にて上記書類を県教育委員会事務局文化財保護課宛進達し、埋蔵文化財発掘調査の着手に関わる事務手続きは完了し、6月1日の現地における発掘調査着手にむけての具体的な作業に入った。

第2節 下瀧名遺跡群発掘調査の変遷

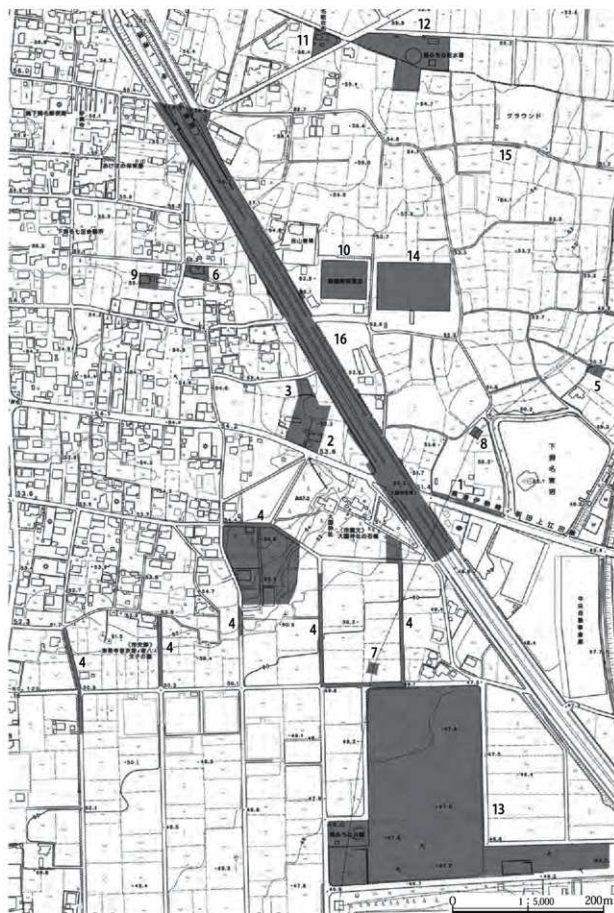
周知の埋蔵文化財包蔵地である下瀧名遺跡群の範囲内においては、上武道路建設に先立って昭和52(1977)～54(1979)年に当事業団が実施した下瀧名塚越遺跡の発掘



第1図 遺跡の位置(国土地理院1/200,000地勢図「宇都宮」平成23年6月1日発行を使用)



第2図 遺跡の位置(国土地理院1/50,000地形図「高崎」平成10年12月1日発行、同「深谷」平成10年9月1日発行を使用)



第3図 下河名遺跡群調査位置図(伊勢崎市現況図1/2,500、No.45・51より作成。この地図の作成にあたっては、伊勢崎市長の許可を得て(平成30年6月27日付、伊都第99-2号)、同市発行の2,500分の1伊勢崎市現況図を複製したものである)

第1表 下海名遺跡群調査一覧表

番号	遺跡名	下海名遺跡群No. (内訳)	調査年度 (西暦)	調査原因	調査主体	遺跡の年代	主な出土遺物
1	下海名遺跡	No.1	2017	一風院遺伊勢城新田上住田跡交差点交直	当事業団	縄文時代後期～中世 古墳時代後期～中世	縄文土器器・須恵器、中世陶器、北沢瓦、時期不明の石製品 縄文土器(古墳後期～古代) ビッド26(古墳後期～古代) 縄文銅網土器、銅鑄片、古代土師器(砥石、軒平・平瓦、円面鏡) 古墳土師器、軒平・平瓦、円面鏡
2	明神遺跡	No.2	1974	土砂採取工事	地町教育委員会	古代～中世	縄文土師器5(古代)、邪伏建物107(古墳時代前期～古代)、溝32(古代～中世)、井戸12(古代)、土坑67(古墳時代後期～中世)、ビッド多数
3	明神遺跡	No.2	1974	土砂採取工事	地町教育委員会	古墳時代後期	古墳邪伏石石室1
4	下海名遺跡	No.3	1977	網堀整備事業	地町教育委員会	古墳時代後期～中世	古墳1、邪伏柱建物5(古代)、邪伏建物107(古墳時代前期～古代)、溝32(古代～中世)、井戸12(古代)、土坑67(古墳時代後期～中世)、ビッド多数
5	寺家遺跡	No.4	1983	土地改良事業	地町教育委員会	古代	邪伏遺蹟(土器集中出土箇所)(古代)3
6	明神遺跡	No.5	1983	土地改良事業	地町教育委員会	中世・近世	溝1(中世)、土坑5(近世)
7	下海名SA遺跡	No.6	1983	道路改良事業	地町教育委員会	古墳時代後期～中世	土坑(古墳後期)、溝(中世)
8	下海名SA遺跡	No.6	1983	道路改良事業	地町教育委員会	古墳時代後期～中世	土坑(古墳後期)、溝(中世)
9	笠遺跡	No.7	1984	個人住宅建設	地町教育委員会	時期不明	不明
10	下海名・本郷遺跡	No.8	1984	倉庫建設	地町教育委員会	古代～中世	溝1・土坑7(ともに時期不明)
11	下海名・本郷遺跡	No.9	1997	墓石再建設	地町教育委員会	古代	邪伏建物(古代)、中世財器
12	上海名・下海遺跡	No.10	1998	水溜交水備設建設	地町教育委員会	古墳時代後期～中世	邪伏建物(古墳後期～古代)、擬立柱建物(古代～中世)、邪伏遺蹟・溝・井戸(中世)
13	下海名・高田遺跡	No.11	1999	堤上式第二工業団地造成	地町教育委員会	古代～中世	邪伏建物3・邪伏遺蹟10(古代)、溝37・井戸42・土坑67・ビッド多数(古代～中世)
14	下海名遺跡No.12地点	No.12	2009	倉庫建設	伊勢崎市教育委員会	古墳時代後期～中世	古墳後期銅鑄・鉄製品(部貝片)、石製穂道具、古代土師器、須恵器、灰製品(黒土器、土師、鉄鏝・鉄釘・紡錘車、中世土器・陶器、砥石・石造物・砥石製品、銅鏡、木製品)
15	下海名遺跡No.13地点	No.13	2012	市道(地)2002号線改修	伊勢崎市教育委員会	古墳時代後期～中世	邪伏遺蹟1(古墳後期)、邪伏建物12・擬立柱建物13(古代)、土坑120(古墳後期～中世)、方形石製品(古墳後期～古代)、溝4・土坑8・ビッド135(古墳後期～古代)、溝4・土坑8・遺跡1(中世)
16	下海名草履遺跡		1977～79	土式道路建設	当事業団	古墳時代前期～中世	邪玉後期～古墳初期土器(二軒瓦式、赤打瓦式、十土瓦式、樽瓦)、古墳前期～古代土器、古墳後期銅鑄・方子、古墳後期～古代須恵器、土師・砥石、古代灰釉陶器、古代青土師器、中世土師瓦土器、陶器・石製品、石臼、近世陶磁器

※ 番号は第2表・第3図と共通、文献は第2表参照。

調査など、今回の発掘調査を含め計15次に及ぶ発掘調査が行われてきた(第3図、第1表)。下瀧名遺跡群範囲内におけるこれまでの発掘調査の経緯について概観しておく。

なお、各次調査によって、遺跡名称を「下瀧名」と表記するものと「下瀧名」と表記するものが混在しているが、各発掘調査報告書によるものをそのまま踏襲した。

1. 明神遺跡(下瀧名No.1・2・5地点)

最も早く行われたのは、今回調査地点から約0.15～0.4km北西に位置する明神遺跡の発掘調査で、昭和49(1974)年に土砂採取工事に先立って当時の境町教育委員会によって実施され、奈良・平安時代の竪穴建物3棟、中世土壇墓2基などの遺構が検出された(下瀧名遺跡No.1地点)。また後日、古墳時代の竪穴小石郭も検出された(下瀧名遺跡No.2地点)。

明神遺跡では、昭和58(1983)年にも土地改良事業に先立ってごく小規模な範囲において発掘調査が行われ、中世の溝1条と近世土坑5基などが検出された(明神遺跡堀込分、下瀧名遺跡No.5地点)。

2. 下瀧名遺跡No.3地点

昭和52(1977)年、境町北部圃場整備事業に先立って、今回調査地点から南西に約0.09～0.55kmの範囲において、当時の境町教育委員会が発掘調査を実施している。対象面積は約9,000㎡で、A～G区の7区に亘って調査が行われた。

古墳時代後期の円墳(下瀧名遺跡A区1号古墳)1基、古墳時代前期の竪穴建物1基、古墳時代後期～平安時代の竪穴建物106棟、掘立柱建物5棟、中世方形居館の掘割の一部をふくむ中・近世の溝32条などの遺構が検出された。

3. 寺家前遺跡(下瀧名No.4地点)

今回調査地点の北東約0.25kmの位置において、昭和58(1983)年、土地改良事業に先立って、明神遺跡(下瀧名遺跡No.5地点)と同時に、当時の境町教育委員会によって発掘調査が行われた。奈良・平安時代の遺物集中出土地点が3箇所検出され、祭祀遺跡と考えられている。

4. 下瀧名SA・SB遺跡(下瀧名No.6地点)

今回調査地点から南西約0.24kmの下瀧名SA遺跡と、今回調査地点から北に約0.15kmの地点の下瀧名SB遺跡の2箇所において、送電線鉄塔の建設に先立って昭和58(1983)年に当時の境町教育委員会によってごく小規模な範囲が発掘調査された。

古墳時代後期の土坑と中世の掘割のごく一部が検出された。

5. 笠遺跡(下瀧名No.7地点)

今回調査地点から北西に約0.46kmに位置している。昭和58(1983)年に土地改良事業に先立って当時の境町教育委員会によって発掘調査が行われた。明神遺跡(下瀧名遺跡No.5地点)の西側に近接する場所である。

個人住宅建設に先立って極小規模な範囲が発掘調査され、時期不明の溝1条と土坑7基が検出された。

6. 下瀧名・本郷遺跡(下瀧名No.8地点)

今回調査地点の北東約0.28kmに位置し、平成6(1994)年に当時の境町教育委員会によって倉庫建設に先立って発掘調査された。平安時代の竪穴建物や15～16世紀頃の方形居館の掘割の一部などが検出された。

7. 下瀧名・堀込遺跡(下瀧名No.9地点)

今回調査地点の北西約0.6kmに位置し、平成9(1997)年に当時の境町教育委員会によって伊勢崎警察署下瀧名駐在所建設に先立ってごく小規模な範囲が発掘調査され、平安時代の竪穴建物も検出された。

8. 上瀧名・下境遺跡(下瀧名No.10地点)

今回調査地点の北約0.55kmに位置し、下瀧名遺跡No.9地点である下瀧名・堀込遺跡の東側に隣接する。水道受水施設の建設に先立って、当時の境町教育委員会によって平成10(1998)年に発掘調査が行われ、古墳時代後期～奈良・平安時代の竪穴建物・掘立柱建物、中・近世の掘立柱建物・竪穴状遺構・溝・井戸などの遺構が検出された。

9. 下湧名・高田遺跡(下湧名No.11地点)

今回調査地点の南約0.2～0.55kmに位置し、下湧名遺跡No.3地点A・F区の南側に隣接する。平成11(1999)年に境上武第二工業団地の造成に先立って発掘調査が行われ、古墳時代後期～平安時代の竪穴建物3棟、竪穴状遺構10基、古代～中世の溝37条、井戸42基、土坑67基、ビット多数と縄文時代～近世の遺物包含層などが検出された。

10. 下湧名遺跡No.12地点

今回調査地点の北約0.25kmに位置し、下湧名遺跡No.8地点である下湧名・本郷遺跡の東側に隣接する。

隣接する下湧名・本郷遺跡と同様、倉庫建設に先立って平成22(2010)年に伊勢崎市教育委員会によって発掘調査が行われ、古墳時代後期の円墳1基、奈良・平安時代の竪穴建物16棟及びビット2基、中世方形居館の外郭に関わるものと考えられる掘立柱建物2棟、竪穴状遺構2基、溝4条、井戸8基、土坑6基などの遺構が検出された。

11. 下湧名遺跡No.13地点

今回調査地点の北約0.47kmに位置し、下湧名遺跡No.10地点である上湧名・下境遺跡の南東約0.11km、下湧名遺跡No.12地点の北東約0.16mにそれぞれ位置している。平成24(2012)年に伊勢崎市道(境)2092号改修工事に先立って伊勢崎市教育委員会によって約70㎡が発掘調査され、古墳時代後期の竪穴建物10棟、竪穴状遺構1基、平安時代の竪穴住居2棟、中近世の溝4条、土坑8基などが検出された。

12. 下湧名塚越遺跡

今回調査地点のすぐ西側に近接した位置である。上武道路建設に先立って、昭和52(1977)～54(1979)年に群馬県教育委員会と、後に発掘調査事業を引き継いだ当事業団が発掘調査を実施した。全長約690m、幅約30m弱、総面積約28,000㎡に亘って発掘調査が行われ、古墳時代前期～平安時代の竪穴建物270棟、奈良・平安時代の掘立柱建物13棟、古墳時代後期5世紀後半の古墳13基、古墳時代～中世の土坑120基、中世方形居館の区画堀・溝13条、中世竪穴状遺構6基などの遺構が検出された。

また、下湧名遺跡群とその周辺では弥生時代の遺構はほとんど検出されていないが、本遺跡では、弥生時代の遺構そのものこそ検出されていないものの、弥生時代後期二軒屋式の小型壺がほぼ完形で出土しており、弥生時代後期の赤井戸式・吉ヶ谷式・樽式等の土器片が約300点出土もしている点が注目される。

第3節 発掘調査の経過

当該工事箇所がその中に位置する伊勢崎市遺跡番号SA036として伊勢崎市遺跡台帳に登録されている埋蔵文化財包蔵地では、包蔵地範囲のほぼ中央を北西から南東にかけて分断する上武道路の路線部分を含めて、これまでに計14箇所が発掘調査され、古墳、古墳時代後期～平安時代の集落、中世の方形居館などの遺構が検出されてきている。そのため、発掘調査の対象となった範囲は非常に狭小ではあるが、多様な遺構・遺物の検出・出土が想定された反面、狭小な範囲における調査だけに、部分的にしか調査が出来ない遺構が多いであろうことが予測され、遺構の時期や性格等を認定することが甚だ困難になることが予想された。今回の発掘調査は、下湧名遺跡群において、上武道路建設に先立って昭和52(1977)～54(1979)年に当事業団が実施した発掘調査を含めて、第15回目の調査である。

発掘調査は、平成29(2017)年6月1日から6月30日まで、計196㎡を対象として実施した。

調査対象地は、国道17号バイパス上武道路と一般県道伊勢崎新田上江田線(群馬県道292号)との大國神社東差点の北東側、一般県道伊勢崎新田上江田線の北側に沿った北西-南東方向に細長い、東西長約50m・南北幅約4mの拡幅部分である。事業地全体を単一の調査区として調査を実施した。

調査日誌抄

- 6月1日 調査着手。物品搬入、調査事務所設営、周辺環境整備、安全対策。
- 6月5日 重機による表土掘削開始。
- 6月6日 重機による表土掘削完了。遺構確認着手。
- 6月7日 遺構確認継続。1号溝、1～6号土坑、1・2号ビット等調査着手。

- 6月8日 遺構確認継続、7・8号土坑、3～10、12～15号ピット土層断面実測及び写真撮影。
- 6月9日 8・9・12号土坑、6・12・17号ピット完掘、平面実測。
- 6月12日 1号竪穴建物、25・26号ピット土層断面実測及び写真撮影。
- 6月13日 遺構調査、平面実測等継続。
- 6月14日 調査区全景写真撮影。13号土坑調査。旧石器確認調査試掘坑設定。
- 6月15日 2号竪穴建物、13～15号土坑調査。旧石器確認調査着手。
- 6月16日 2号竪穴建物、14号土坑調査、写真撮影、平面実測、遺構調査完了。旧石器確認調査継続。
- 6月19日 旧石器確認調査完了。すべての調査を完了する。
- 6月21日 重機による埋め戻し作業着手。
- 6月22日 重機による埋め戻し作業完了。撤収準備。
- 6月23日 県伊勢崎土木事務所現地確認。基礎整理。
- 6月26日 記録類・物品等撤出、現地撤収。
- 6月27日 事業団本部にて基礎整理。
- 6月28日 事業団本部にて基礎整理。遺物収納。
- 6月29日 基礎整理終了。発掘調査に係るすべての作業を終了。

第4節 発掘調査の方法

1. 座標の設定

発掘調査に用いた座標は世界測地系(日本測地系2000平面直角座標第IX系)であり、10m×10mを基本とし設定した。遺構図中の座標については、座標値の下3桁を「X軸-Y軸」の順で記し、「X=61600、Y=94200」の場合、「600-200」のように表記した。

2. 調査の方法

先述したように、調査対象地は、東西50m、南北4m、対象面積196㎡とごく小規模な範囲であった。

事業地内には、地表面に0.1～0.15m程の厚さで碎石が敷かれ、その下層に厚さ0.3～0.4m程の頻繁に耕起された耕作土が堆積していた。

さらにその下層には、狭い溝状に細長く耕地を掘削す

るトレンチャーと称される農業機械によってローム層に達する深さまで広範囲に攪拌された耕作土の層が、0.15～0.25m程の厚さで堆積していた。そのため、調査範囲が狭小であることと相俟って、検出された遺構の残存状態はいずれも良くなかった。

表土から農業機械によって掘削された溝の半分くらいの深さまで中型のバックホーによって掘削し、これを除去した。

表土と農業機械によって攪拌された土を除去した後、農業機械によって掘削された溝の間に残されたローム層の上面を遺構確認面として、発掘作業員の人力による遺構確認のための平面精査を実施した。

なお、遺構確認面に部分的に残った、農業機械によって掘削された細い溝状の部分は、遺構と重複する部分のみ、発掘作業員によって人力で掘削し、記録・図化も、同様に遺構と重複する箇所のみで実施した。

確認された遺構は、順次、埋没土層確認用ベルトを任意に設定するか、あるいは半裁し、発掘作業員が移植機等で掘削した後、遺構断面及び平面測量及び写真撮影等を行い、実測図及び写真によって記録した。

遺構確認、遺構掘り下げの指示、土層観察、遺構及び土層断面の写真撮影は調査担当者が行った。また、高い位置からの調査区全景写真の撮影は、有資格業者が運転・操作する高所作業車に調査担当者が搭乗し、行った。

各遺構の土層断面図、遺構平面図、遺物出土位置の記録・図化は、調査担当者の指示と立ち合いの下、測量業者に委託して行った。

発掘調査記録類は、写真については、デジタルカメラで撮影されたものはデジタルデータとして、またフィルムによって記録されたものはフィルムおよび検索用の焼き付け写真として保管し、整理作業に備えた。

遺構番号は、今次調査における通し番号とした。また、調査過程において出土した遺物については、出土した遺構ごとに出土地点を記録し、整理・集約した上で、洗浄および出土遺跡・遺構・出土地点等に関するデータを注記する作業を業者委託し、業者から提出を受けた成果品については、発掘調査担当者が逐次、点検・照合し、受領した。

調査終了後の埋め戻しの作業は、基本的にバックホーを主体とする重機によって行った。

3. 遺構測量

遺構図は遺構断面及び平面実測図とも縮尺1/20を基本とした。

遺構平面実測図の作成に当たっては、指名競争入札によって落札した測量会社にデジタル測量を委託し、データ及び打ち出し図面の提出を受けた。

遺構断面実測図は、原則として発掘現場における発掘作業員によってアナログ実測で作成されたものを元に、測量会社にデジタルデータ化を委託し、遺構平面実測図と同様、データ及び打ち出し図面の提出を受けた。

上記、委託先測量会社により作成されたデジタルデータ成果品およびアナログ実測された原図等は、調査記録として保存されている。

4. 遺構写真撮影

発掘調査において、すべての遺構の写真は発掘調査担当者が撮影した。発掘調査の過程で検出されたすべての遺構及び発掘調査に係る各種作業の進捗状況をデジタルカメラで撮影し、撮影データを保存した。

また、調査記録として、遺構ごとに土層断面、遺物出土状態、遺構全景等の写真撮影を行い、さらに必要に応じて遺構の各部分について微細な接写を行った。

第5節 整理作業の経過と方法

整理作業は、平成30年6月1日から同年8月31日までの3箇月間、群馬県伊勢崎土木事務所の委託を受けて公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。対象となった発掘調査時に作成された遺構図面は15枚、記録写真はデジタル画像で1204カットであった。

まず、調査現場から搬入された出土遺物コンテナ1箱分の基本的な分類・住訳と登録、集計作業を実施した後、石製品の実測、分類、観察作業を実施した。発掘調査記録については、台帳整備、写真記録のチェックを行い、遺構図と写真記録の照合や誤認・誤記の修正作業を行った。また、数度に亘って発掘調査担当者からの調査所見や土層注記について聞き取りを行い、遺構遺物についての理解の深化に努めた。

発掘調査時に作成された遺構平面図・断面図の点検、

修正・整合・編集を行った。

出土遺物については、発掘調査時に洗浄・注記をすべて終えていた遺物を選別、接合・復元し、その後、必要に応じて順次、写真撮影、実測及びトレース、採拓等の作業を実施した。

発掘調査時に撮影された各種遺構写真は、発掘調査報告書に掲載するものを選別し、写真図版の編集を行った。また、これらの作業と並行して、本文原稿・遺物観察表等の執筆を順次進めていった。

遺構図・遺物図・遺構写真・遺物写真・本文原稿・遺物観察表等のレイアウトを作成した後にデジタル編集を行い、本報告書の原稿を作成した。

作成された原稿は、指名競争入札によって落札した業者に委託され、印刷・製本の業務を実施する。なお、業者委託した印刷業務の推移の中で、原稿の校正作業を実施し、完成後、納品を受け、納品された発掘調査報告書は、検品の上、完了検査を実施し、活用に資するために関係各機関へ発送する作業を行う。

また、これらの作業と並行して、調査及び整理業務の過程で作成された遺構・遺物の各種図面・写真等の記録類を収納する作業を実施した。

発掘調査及び整理業務の過程で作成された遺構・遺物にかかる各種図面及び写真等の調査記録資料は、一括して群馬県埋蔵文化財調査センターに収納・保管されている。

第1章参考文献
群馬県2007『はばたけ群馬・県土整備プラン2008～2017』
群馬県2013『はばたけ群馬・県土整備プラン2013～2022』
群馬県2014『はばたけ群馬プラン・第4次群馬県総合計画・重点プロジェクト(平成26年4月1日改訂)』
群馬県2018『はばたけ群馬・県土整備プラン2018～2027』
群馬県県土整備部道路整備課(道路企画室)2013『群馬がはばたけたくての7つの交通輪構想』
(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2018『年報』37
マッピングぐんま
<http://mapping-gunma.pref-gunma.jp/pref-gunma/top>

第2章 周辺の環境

第1節 地理的環境

今回の調査対象地は、伊勢崎市遺跡番号SA036下湧名遺跡群の範囲内に当たる伊勢崎市境下湧名字塚越3047-1である。群馬県南端部の中央に位置する伊勢崎市の南東郊外、伊勢崎市中心市街地から南東約5kmに位置している。

現在の伊勢崎市は、平成17(2005)年、隣接する佐波郡境町、同東村、同赤堀町等3町村と合併して成立したが、発掘調査対象箇所は、所謂「平成の大合併」以前は佐波郡境町に属する地であった。

下湧名遺跡群は、南北約2.5km・東西約1kmに亘る広大な範囲に及び、縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世の遺物散布地、集落、古墳、墳墓その他として伊勢崎市の遺跡台帳に登録されている埋蔵文化財包蔵地である。

この下湧名遺跡群周辺は、渡良瀬川が形成した更新世の開析扇状地である大間々扇状地の扇端部に立地している。大間々扇状地はみどり市大間々町を扇頂とする南北約18km、扇端の東西約13km、流域面積約125km²の群馬県内最大の扇状地である。武蔵野台地や荒川扇状地と並ぶ関東地方でも有数の大型扇状地として知られている。良く知られているように、赤城山山頂付近から南流する利根川支流の早川を境に大きく新旧2面に分けられ、西側半分が古期面であるⅠ面・桐原面で約5万年前に形成されたと考えられている。一方、東側半分が新期面であるⅡ面・藪塚面で、約2万年前に形成されたと考えられている。本遺跡は、西半を占めているⅠ面・桐原面の南東端近く、早川右岸の湧名台地の南東端部に立地し、標高は約50mである。

この、大間々扇状地の古い方のⅠ面・桐原面は、中部ローム層、上部ローム層によって覆われ、粗粒砂礫層を基盤とし、中小河川による解析が進んでおり、南北に細長い谷地が幾筋も入り組んでいる。新しい方のⅡ面・藪塚面は、上部ローム層のみが堆積し、ロームと砂礫層からなる不透水層の下に不完全な粘土層を挟んだ帯水層、さ

らにその下に不透水層があり、扇端部の標高55～60m付近で帯水層が浅くなっている。扇端部が僅かに解析されてはいるものの、典型的な扇状地地形を遺しており、扇端部には湧水点が密集している。

早川流域の台地部では、土壌の特性を活かした牛蒡栽培が盛んであるが、台地部を北西から南東に横断する上武道路の開通後は大型店舗や工場の進出が顕著で、台地上では宅地化も進んでいる。

第2節 歴史的環境

先述の通り下湧名遺跡群は南北約2.5km・東西約1kmの広大な範囲に及ぶ、縄文・古墳・奈良・平安・中世の複合遺跡である。今回の調査を含めて範囲内において計15次に亘る調査が行われ、古墳、古墳時代前期～平安時代中期集落、古代水田、中世居館・墳墓などの遺構が検出されている。

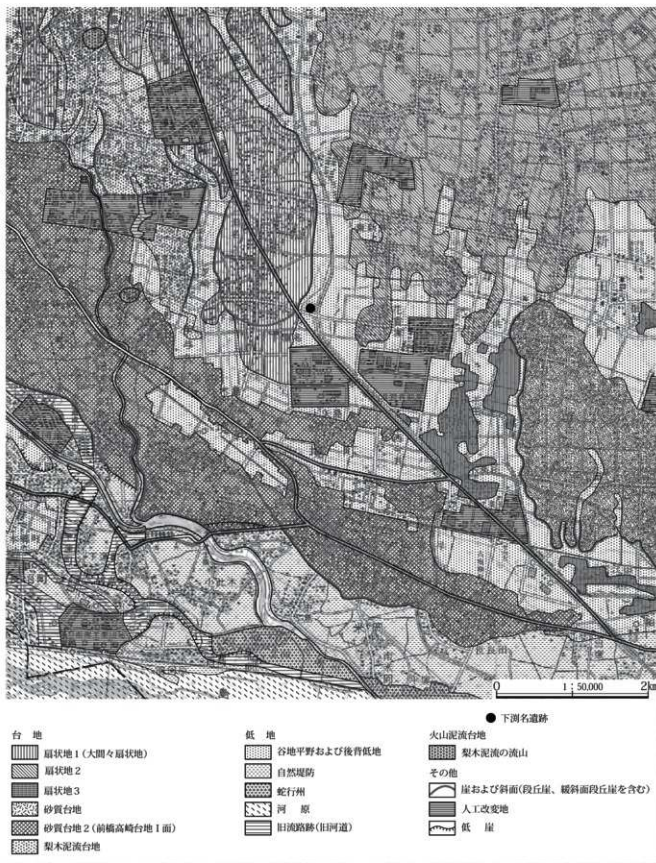
本遺跡周辺は、群馬県内でも屈指の、遺跡が濃密に分布する地域であり、これまで上武道路建設、県道・市道の建設・改良、工業団地・住宅団地造成、圃場整備事業、官公署・事業所・住宅・送電鉄塔等建設事業に先立って度々発掘調査が行われており、多くの遺構・遺物が検出・出土している。ただし、旧石器時代から弥生時代までの遺構・遺物はあまり多くはない。

なお、遺跡名に見える「湧名」の地名には、「湧名」とするものと「湧名」とするものが混在するが、伊勢崎市遺跡台帳に掲載する遺跡名の表記の通りとした。また、各遺跡名の末尾に付した番号は、第3・6図、第1・2表と共通している。

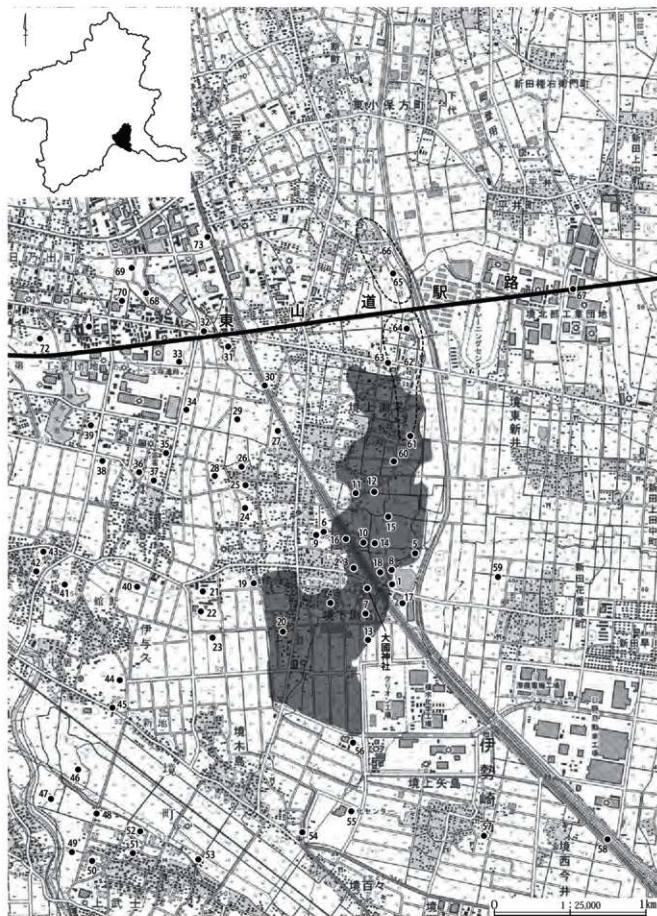
1. 旧石器時代

先述したように、本遺跡は大間々扇状地の扇端部に位置しているため、扇尖部に比べて分布は疎である。

本遺跡地点の北西約2.7kmに位置する、八寸長溝遺跡(69)では、この地域において唯一、石器ブロックが検出された。この石器群は、始良Tn火山灰層下位の暗色帯中に文化層を有し、台形様石器を組成する。



第4図 周辺地形分類図(国土交通省国土政策局国土情報課5万分の1都道府県土地分類基本調査(高崎・深谷)を一部改変)



第5図 遺跡位置図及び周辺遺跡分布図(国土地理院 1/25,000地形図「伊勢崎」平成15年2月1日発行、
同「上野境」平成22年12月1日発行を使用)

第2章 周辺の環境

第2表 周辺遺跡一覧表

遺跡	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	種別・概要	文献
1 下流名遺跡今河調査地点				○	○		○		古墳時代～中世土坑・ピット、古代集落	本報告書
2 明神遺跡(下流名遺跡No.1地点)				○	○		○		古代集落、中世墳墓	1
3 明神遺跡(下流名遺跡No.2地点)				○	○				古墳時代後期円墳、古墳時代～古代集落	1
4 下流名遺跡(下流名遺跡No.3地点)				○	○				古墳時代後期円墳、古墳時代～古代集落、中世屋敷	2
5 寺家前遺跡(下流名遺跡No.4地点)				○	○				古代祭祀	3
6 明神遺跡(下流名遺跡No.5地点)							○		中世屋敷	3
7 下流名SA遺跡(下流名遺跡No.6地点南)									中世屋敷掘削	
8 下流名S8遺跡(下流名遺跡No.6地点北)				○					古墳時代土坑	
9 笠遺跡(下流名遺跡No.7地点)							○		中・近世溝・土坑	4
10 下流名・本郷遺跡(下流名遺跡No.8地点)									古代集落、中世屋敷掘削	
11 下流名・榑込遺跡(下流名遺跡No.9地点)									古代集落	
12 上流名・下埜遺跡(下流名遺跡No.10地点)				○	○				古代集落、中世屋敷掘削	
13 下流名・高田遺跡(下流名遺跡No.11地点)				○	○				古代集落、中世屋敷掘削	5
14 下流名遺跡No.12地点				○	○				古墳時代後期円墳、古代～中世集落	6
15 下流名遺跡No.13地点				○	○				古墳時代～古代集落、中世屋敷掘削	7
16 下流名塚遺跡		○		○	○		○		旧石器～弥生時代遺物散布地、古墳、古墳時代～古代集落、中世屋敷(湖名遺)	8・29
17 九反田遺跡									散布地(時期不明)	9
18 塚遺跡Ⅱ									散布地(時期不明)	9
19 出口遺跡				○	○				古墳時代前期周溝墓・祭祀、古墳時代～古代集落	10
20 下流名・三ツ吉塚遺跡									古代の溝	10
21 采女小学校校庭遺跡				○	○				古墳時代集落・祭祀	11
22 土橋遺跡				○	○				古墳時代～古代集落	10
23 島南戸遺跡				○	○				古墳時代集落	10
24 下流名・田畑山1遺跡				○	○				埴輪散布地	9
25 田畑山古墳				○	○				古墳時代後期円墳	9
26 下流名・田畑山2遺跡				○	○				埴輪散布地	9
27 上流名・新町遺跡							○		古代遺物散布地	9
28 下流名・雷電前遺跡		○		○	○				縄文時代～古墳時代遺物散布地	9
29 糞神谷遺跡				○	○				古墳時代～古代遺物散布地	9
30 上流名・糞神谷遺跡				○	○				古墳時代後期円墳・集落・祭祀、古代水田	12
31 上流名・神谷遺跡		○		○	○				旧石器～縄文時代前期～古代遺物散布地	9
32 伊与久遺跡				○	○				古墳時代集落	13
33 十三宝塚遺跡		○		○	○				旧石器時代遺物散布地、古墳時代後期集落、古代寺院・集落	14
34 伊与久・蔭初遺跡				○	○				古墳時代遺物散布地	9
35 伊与久・雷電裡遺跡				○	○				古墳時代集落	15
36 采女2号墳				○	○				古墳時代後期円墳	16
37 雷電神社古墳				○	○				古墳時代後期円墳	16
38 伊与久・明神前遺跡				○	○				遺物散布地(時期不明)	9
39 伊与久・矢中遺跡				○	○				古墳時代遺物散布地	9
40 伊与久・後香遺跡				○	○				古代遺物散布地	9
41 伊与久・東馬場遺跡				○	○	○			古墳時代～中世遺物散布地	9
42 伊与久・西馬場遺跡				○	○				古墳時代散布地	9
43 伊与久・須久茂塚遺跡				○	○				古墳時代散布地	9
44 伊与久・久保田東遺跡Ⅱ				○	○				古墳時代集落、古代水田、	17
45 伊与久・久保田東遺跡				○	○		○		古墳時代集落、近世溝	18
46 伊与久・寺町塚遺跡				○	○				古代水田	19
47 上武士・新井遺跡1				○	○				縄文時代～古墳時代散布地	9
48 上武士・新井遺跡2				○	○				縄文時代、古墳時代～古代散布地	9
49 上武士・新井遺跡3				○	○				縄文時代～古代遺物散布地	9
50 上武士・新井遺跡4				○	○				縄文時代～古墳時代～古代遺物散布地	9
51 上武士・堀南2遺跡				○	○				縄文時代～古墳時代～古代遺物散布地	9
52 上武士・堀南1遺跡				○	○				縄文時代～古墳時代～古代遺物散布地	9
53 上武士・堀北遺跡				○	○				古墳時代遺物散布地	9
54 木島・雉子尾遺跡				○	○				古代遺物散布地	9
55 木島・餅地遺跡				○	○				古墳時代～古代集落	
56 下流名天王谷遺跡									散布地(時期不明)	9
57 上矢船遺跡				○	○				古墳時代～古代集落	19
58 西今井遺跡				○	○				古墳時代～古代集落	20
59 梨子木遺跡		○	○	○	○				旧石器時代～古代散布地	21
60 上流名遺跡Ⅰ～V地点				○	○	○	○		古代～近世集落、中世屋敷	22
61 上流名遺跡Ⅵ地点				○	○				古墳時代～古代集落、中世方形形穴状溝・土坑・溝	23
62 湖名古墳群				○	○				古墳時代後期古墳群	16
63 上流名雙見山古墳				○	○				古墳時代後期前方後円墳	18・24
64 吉田遺跡				○	○				古墳時代後期円墳	4
65 鶴巻古墳				○	○				古墳時代後期円墳	25

道 跡	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中世	近世	種 別 ・ 概 要	文 献
66 下谷古墳群				○				古墳時代後期内棺群	16
67 矢ノ原道跡				○	○			古代官道・溝・祭祀・因道伝	26
68 長溝道跡				○	○			古墳時代～古代遺物散布地	
69 八寸長溝道跡	○			○	○	○	○	旧石器時代環状ブロック、古墳時代前期～古代集落、 古代水田、中・近世溝・土坑	27
70 秩平塚道跡				○	○			古墳時代～古代遺物散布地	
71 油免道跡				○	○			古墳時代～古代遺物散布地	
72 中島道跡				○				古墳時代遺物散布地	28
73 三空間ノ谷道跡				○	○			古墳時代後期集落・祭祀・道路、古代水田	12

文献

- 1 埴町教育委員会編「明神道跡発掘調査報告書 附上洞名出土古瓦、礎調査報告」1975
- 2 埴町教育委員会編「下洞名道跡発掘調査概報一昭和52年度限営は場整備に伴う調査一」1978
- 3 埴町教育委員会編「昭和58年度埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 寺家前道跡 明神道跡」1984
- 4 埴町教育委員会編「昭和59年度埴町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 笠道跡 吉田道跡」1985
- 5 埴町教育委員会編「下洞名・高田道跡 境上武第二工業団地造成に係る埋蔵文化財発掘調査の記録」2002
- 6 伊勢崎市教育委員会編「下洞名道跡12 倉庫建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」2010
- 7 伊勢崎市教育委員会編「下洞名道跡13 市道(境)2992号拡改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」2013
- 8 群馬県埋蔵文化財調査事業団編「下洞名塚越道跡 一般国道17号(上武道路)改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」1991
- 9 埴町教育委員会編「埴町の道跡」1986
- 10 埴町教育委員会編「土橋・三ツ古屋・出口・島海戸道跡発掘調査概報」1977
- 11 埴町教育委員会編「土橋道跡第5地点 埴町立采女小学校屋内運動場増改築事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書」1987
- 12 群馬県埋蔵文化財調査事業団編「下洞名眞神谷道跡 三空間ノ谷道跡 一般国道17号(上武道路)改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」1991
- 13 埴町教育委員会編「伊与久道跡」1973
- 14 群馬県埋蔵文化財調査事業団編「史跡十三宝塚道跡」1992
- 15 埴町編「埴町古代道跡」1978
- 16 群馬県編「上毛古墳総覧」1938、群馬県教育委員会編「群馬県古墳総覧」2017
- 17 伊勢崎市教育委員会編「伊与久・久保田東道跡Ⅱ」2007
- 18 埴町教育委員会編「伊与久・久保田東道跡発掘調査の記録」2005
- 19 埴町教育委員会編「矢ノ原道跡発掘調査概報」1979
- 20 群馬県埋蔵文化財調査事業団編「西今井道跡 一般国道17号(上武道路)改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」1986
- 21 新田町誌編纂室編「新田町誌2 資料編(上) 原始・古代・中世」1987
- 22 埴町教育委員会編「上洞名道跡 第1次～第4発掘調査概報」1980～83、伊勢崎市教育委員会編「平成17年度市内道跡確認調査報告書」2006
- 23 伊勢崎市教育委員会編「上洞名道跡」Ⅵ 2008
- 24 埴町史編纂委員会編「埴町史」3
- 25 群馬県史編纂室編「群馬県史3 資料編3 原始古代3 古墳時代」1981
- 26 矢ノ原道跡発掘調査事務所編「矢ノ原道跡の発掘調査の概要」1987
- 27 群馬県埋蔵文化財調査事業団編「八寸長溝道跡 伊勢崎・東第二流通団地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」2001
- 28 伊勢崎市史編纂室編「伊勢崎市史 通史編1 原始・古代・中世」1987
- 29 山崎一1972「群馬県古城址の研究」下 群馬県文化事業振興会

このほか、約1.7km北西に位置する上瀧名・神谷遺跡(31)や、約0.8km北に位置する上瀧名遺跡Ⅰ～Ⅴ地点(60)ではナイフ形石器が、北西約1.8kmに位置する十三宝塚遺跡(33)では槍先形尖頭器が、上武道路建設に先立って当事業団が調査した、本遺跡に近接する下瀧名塚越遺跡(16)では槍先形尖頭器とともに細石刃核も出土している。今後の、周辺地域における発掘調査の進展によって、本遺跡周辺においても旧石器時代の遺跡は増加することであろう。

2. 縄文時代

本遺跡周辺地域においては、旧石器時代の遺跡と同様、縄文時代の遺跡もあまり多くない。縄文時代の竪穴建物本遺跡周辺地域ではまだ1棟も発見されていない。

旧石器時代のナイフ形石器が出土した上瀧名・神谷遺跡や、今回調査地点の約2km南東に位置する、上武道路建設及び早川河川改修に先立って当事業団が発掘調査を実施した西今井遺跡(58)では縄文時代草創期の土器が出土している。

今回調査地点の西側に近接する下瀧名塚越遺跡や、約0.7km東に位置する太田市新田花香塚の梨子木遺跡(59)からは、縄文時代早期から後期にかけての土器や石器や土製耳飾りが出土している。

また、中～後期の土器は、約1.35km北西に位置する下瀧名・雷電前遺跡(28)、約2.5km南西に位置する上武士・新井1～4遺跡(47～50)及び上武士・堀南1・2遺跡(51・52)などからも出土している。

3. 弥生時代

本遺跡周辺では、現在確認されている弥生時代の遺跡は、旧石器時代・縄文時代の遺跡よりもさらに少ない。

今回調査地点の西側に近接する下瀧名塚越遺跡において、弥生時代後期二軒屋式の小型壺をはじめ、後期の赤井戸式・吉ヶ谷式・樽式等の土器片が約300点出土しており、また、約0.7km東に位置する梨子木遺跡においても弥生時代後期の土器片が出土しているが、両遺跡とも弥生時代の遺構は全く検出されていない。

瀧名台地から約3km南東に離れた太田市新田の木崎台地縁辺部に至って、ようやく弥生時代の集落が発見されている程度である。

4. 古墳時代

(1) 古墳

本遺跡が立地する早川右岸の瀧名台地は古墳時代後期の古墳が密集する地域であり、本遺跡本調査地点の約1.5km北には瀧名古墳群(62)、約2km北には下谷古墳群(66)の二つの古墳群が存在する。また、約0.85km西に位置する出口遺跡(19)からは古墳時代前期の方形周溝墓が検出されている。

昭和10(1935)年に群馬県が実施した県内所在古墳の悉皆調査の成果を受けて3年後の昭和13(1938)年に刊行された『上毛古墳総覧』には、両古墳群において前方後円墳4基、円墳66基の計70基がカウントされており、平成29(2017)年に刊行された群馬県教育委員会編『群馬県古墳総覧』でも当該箇所において計58基の古墳が存在していたことが報告されている。しかしながら、両古墳群内で現存しているのは北側に位置する下谷古墳群内、本調査地点の北約2.1kmに所在する6世紀後半と考えられる径34m・高さ2.5mの円墳である鶴巻古墳(65)のみである。

本調査地点から約1.5km北に位置する上瀧名雙児山古墳(63)は、南側の瀧名古墳群に属する古墳で、現在は全くその姿を地表には留めていないが、明治23(1890)年と昭和37(1962)年に部分的に発掘調査が行われ、前方部を北西に向けた全長90m、後円部径60m、前方部幅82mの墳丘に、幅20mの周濠が巡る当該地域最大の前方後円墳であったことが判明しており、6世紀後半のものと思われる。形象埴輪(人物2、橋1)や円筒埴輪片が出土しており、形象埴輪の内の武人埴輪は、東京国立博物館に所蔵されている。

同じく瀧名古墳群内では、本調査地点の約1.5km北、先述の上瀧名雙児山古墳の約0.25m北東に位置する吉田遺跡(64)からは『上毛古墳総覧』に掲載されていない円墳が2基検出されている。また、上武道路の建設に先立って当事業団が発掘調査を行った、北西約1.6kmに位置する上瀧名・裏神谷遺跡(30)でも6世紀後半頃の古墳が検出されている。北西側約1.75kmに所在する栗女2号墳(36)なども、かつて存在した6世紀後半頃の円墳である。

(2) 下瀧名遺跡群内の古墳

本調査地点の西側に近接する下瀧名塚越遺跡からは、

上武道路の建設に先立って昭和52(1977)～54(1979)年に実施された発掘調査において5世紀後半～7世紀頃と見られる円墳12基、方墳1基の計13基が検出され、多数の円筒埴輪片や土器が出土した。いずれも墳丘は完全に削平されており、発掘調査によって初めて存在が確認できたものである。

平成3(1991)年に当事業団が刊行した下瀬名塚越遺跡の発掘調査報告書では、当時の境町教育委員会が昭和52(1977)年に圃場整備事業に先立って下瀬名遺跡No.3地点(4)の発掘調査を行った際に検出された円墳である下瀬名遺跡A区1号古墳と併せて計14基を下瀬名古墳群として扱っている。また、『上毛古墳総覧』に掲載されながらも現在は全く失われてしまっている、大國神社境内付近に存在していた采女52・53号墳などもそれに加えるべきであろう。県内平野部に一斉に形成される初期群集墳の典型的な事例の一つと言える。

また、約0.2km北西に位置する明神遺跡(3)からは竪穴小石郭が、北約0.25kmに位置する下瀬名遺跡No.12地点(14)からは円墳が検出されている。

(3)集落遺跡

弥生時代の集落が全く検出されていない本遺跡周辺でも、古墳時代になると大規模な定住集落が形成されるようになってくる。古墳時代前期の集落は、水田耕作に適した低地の縁辺部に多く形成されている。古墳時代前期の集落は、約2.7km北西に位置する八寸長溝遺跡、約1.6km北西に位置する伊与久・雷電裡遺跡(35)、約1.8km南東に位置する伊与久・久保田東遺跡Ⅱ(44)、約1.25km西に位置する土橋遺跡(22)、約0.85km西に位置する出口遺跡、約1.2km西南西に位置する島海戸遺跡(23)、約1.5km西南西に位置する木鳥・耕地遺跡(55)、約1.8km南西に位置する上矢嶋遺跡(57)等において発見されている。また、今回調査地点の西側に近接する上瀬名塚越遺跡では、古墳時代前期の竪穴建物40棟検出されている。

古墳時代後期になると、低地周辺の微高地に止まらず、台地内部にまで集落は拡大していく。水田・畑作が可能な土地を求めて、人々の活動域が広がっていった様子が伺える。約1.8km北西に位置する十三宝塚遺跡、約0.85km西に位置する出口遺跡、約1.25km西に位置する土橋遺跡、約1.2km西に位置する采女小学校校庭遺跡(21)などで、集落が検出されている。集落は、6世紀後半頃か

らはさらに台地の奥地にまで広がり、約2.7km北西に位置する八寸長溝遺跡、約2.5km北西に位置する三室間ノ谷遺跡(73)、約1.8km北西に位置する十三宝塚遺跡、約1.6km北西に位置する伊与久・雷電裡遺跡、上瀬名・真神谷遺跡、約1.8km南西に位置する伊与久・久保田東遺跡(45)及び伊与久・久保田東遺跡Ⅱ、約1.5km南南西に位置する木鳥・耕地遺跡、約1.25km西に位置する土橋遺跡、約0.85km西に位置する出口遺跡、約2km南東に位置する西今井遺跡、本遺跡の約1.8km南東に位置する上矢島遺跡などにおいて古墳時代後期の集落が検出されている。

(4)下瀬名遺跡群内の集落遺跡

本調査地点の西側に近接する下瀬名塚越遺跡から検出された古墳時代後期の竪穴建物は15棟程度と比較的少なく、集落の中心が北側か西側の隣接地に移動していった可能性も考えられる。また、本調査地点の北約0.55kmに位置する上瀬名・下境遺跡(12)、北約0.25kmに位置する下瀬名遺跡No.12地点、北西約0.2kmに位置する明神遺跡、南西約0.2kmに位置し、大國神社境内の南側に隣接する下瀬名遺跡No.3地点(4)等においても古墳時代後期の竪穴建物が検出されている。約0.24km南西に位置する下瀬名SA遺跡(7)及び約0.15km北に位置する下瀬名SB遺跡(8)からは古墳時代の土坑が検出されている。

5. 奈良・平安時代

(1)官衙・官道・官社・寺院

律令制下において、群馬県域はほぼ上野国の領域に当たっており、国内には「碓氷・片岡・甘楽・多胡・緑野・那波・群馬・吾妻・利根・勢多・佐位・新田・山田・邑楽」の14郡が置かれた(当初13郡、和銅4(711)年に多胡郡設置で14郡)。

本遺跡の所在地は、佐位郡内に当たっている。

『和名類聚抄』によれば、佐位郡には、名橋(多橋)、雀部、美侶、佐井、瀧名(瀧名)、岸新、反治、驛家の8郷が記載されており、郡の等級としては中部であった。「瀧名(瀧名)」の郷名が見えており、本遺跡が所在する「瀧名(瀧名)」の地名が、古代まで遡ることが明らかである。

佐位郡の郡家は、本遺跡今回調査地点の約5.2km北西に位置する伊勢崎市上植木町に所在する三軒屋遺跡である。同遺跡の約1km北側には7世紀後半から9世紀前半にかけての寺院跡であり、佐位郡の郡領層が建立した

寺院と考えられる上植木廃寺が存在している。当地には、いち早く本格的な寺院が建立できるような強い経済基盤を有する在地首長が存在していた証である。「長元3(1030)年上野国不与解由状案」(いわゆる「上野国交替実録帳」)定額寺項には、「放光寺」、「法林寺」、「弘輪寺」、「慈廣寺」の4寺の名称が記載されている。冒頭の「放光寺」が前橋市に所在する山王廃寺に当たるとは、出土した文字瓦によって確実であるので、「法林寺」、「弘輪寺」、「慈廣寺」の三箇寺が、伊勢崎市上植木廃寺、太田市寺井廃寺、東吾妻町金井廃寺のどれかに、それぞれ当たるとは考えられていない。

今回調査地点の周辺においては、約1.8km北で東北東-西南西方向に東山道駅路牛堀・矢ノ原ルートが検出されている。7世紀後半に造営された都と陸奥国府とを結ぶ古代国家の幹線道路で、初期東山道駅路の本道と考えられている。本遺跡の約2.3km北東に位置する矢ノ原遺跡(67)では、路面幅約12mに及ぶ巨大な道路遺構とその側溝が検出され、東山道駅路牛堀・矢ノ原ルート発見の端緒となった遺跡の一つとして、学史に名高い遺跡である。

北西約1.8kmに位置する十三宝塚遺跡は、国指定史跡であり、当初は佐位郡家と見られていたが、伊勢崎市上植木町の殖蓮小学校校庭および周辺において古代佐位郡家正倉院を構成する倉庫群の遺構が発見され、その状況が「長元3(1030)年上野国不与解由状案」(いわゆる「上野国交替実録帳」)郡家項の記述と一致したため、三軒屋遺跡が佐位郡家の遺構であることが明白になった。

十三宝塚遺跡からは、東辺92m・北辺60m・南辺82mの台形状に柵・溝等で区画された中に基礎建物2棟と数棟の掘立柱建物群が検出された。また、柵・溝等で区画されたエリアの外側からも、整然と並ぶ掘立柱建物群が検出されている。寺院伽藍とその外側に位置する寺務施設の遺構と考えられる。出土遺物には、火舎・鉢・碗・盤・小壺からなる奈良三彩陶器のセットや灰釉陶器の水瓶・長頸瓶、銅地鍍金押出仏などの仏教関係遺物、上野国分寺に使用された瓦と同じ意匠の瓦などがある。瓦には佐位郡内の郷名を示す「淵」(淵名郷)、「反」(反治郷)、「雀」(雀部郷)、「佐」(佐井郷)等の文字が刻書されたものが含まれる。

今回調査地点から上武道路を挟んだ西側、約0.1kmには、「延喜式」神名帳に記載がある、所謂延喜式内社であ

る大國神社が鎮座している。遅くとも平安時代後期までには成立していたと見られる『上野国神名帳』の佐位郡項には「大國玉明神」・「郡玉明神」が見え、前者が本社に該当すると考えられている。いずれにせよ、現在の鎮座地が古代以来であるか否かは不明ながらも、社自体は古代に遡ることが確実である。『上野国神名帳』一宮本、総社本、群書類従本いずれにも佐位郡項で「従一位大國玉明神」と記載する点では一致しているが、一宮本には、鎮守12社の12番目に「従一位大國大明神」と、群書類従本では同じく鎮守12社の12番目に「従一位大國玉大明神」とあるが、総社本では鎮守10社のうちには記載がない。なお、現在の社殿その他の建造物は、いずれも江戸時代後期以降のものであるが、境内には延徳2(1490)年の路を有し、室町期の作風を示す高さ2.38mの石輪があり、伊勢崎市重要文化財に指定されている。

(2) 集落遺跡

検出された古代の集落は、約0.85km西に位置する出口遺跡、約1.25km西に位置する土橋遺跡、約1.6km北西に位置する伊与久・雷電裡遺跡、約1.8km南西に位置する伊与久・久保田東遺跡及び伊与久・久保田東遺跡Ⅱ、約1.5km南南西に位置する木鳥・耕地遺跡、約2.2km南東に位置する西今井遺跡、約1.8km南東に位置する上矢島遺跡などで検出されている。

約2.7km北西に位置する八寸長溝遺跡、約2.5km北西に位置する三三間ノ谷遺跡、約1.6km北西に位置する上測名・裏神谷遺跡、約1.8km南西に位置する伊与久・久保田東遺跡Ⅱ、約2.4km南西に位置する伊与久・志町畑遺跡(46)では、天仁元(1108)年浅間山噴火の際に降下した火山灰As-Bによって覆われた水田が検出されている。

(3) 下測名遺跡群内の集落遺跡

本遺跡周辺で検出された奈良・平安時代集落の多くは、古墳時代後期から継続するものが多いが、中には奈良時代あるいは平安時代から集落の形成が始まっているところもある。

本調査地点の西側に近接する下測名塚遺跡から検出された当該期の竪穴建物は100棟以上と非常に多く、遺跡所在地の地名から見て「和名類聚抄」上野国佐位郡内の郷の一つである測名(測名)郷を構成する集落の中心部分であると考えられる。

検出された8世紀代の竪穴建物は約40棟、掘立柱建物

は12棟で、集落は調査範囲の南東部分に集中するが、わずかに北西部からも検出されている。古墳を避けて竪穴建物や掘立柱建物が造られていることが特徴的であり、8世紀代に至ってもなお、墓域の概念が遺っていたことが判明する。

検出された9世紀の竪穴建物、掘立柱建物ともに約10棟ずつで、約300m程離れて南東部と北西部にそれぞれ集中している。調査範囲内においては、9世紀代における集落の拡大は指摘できないが、居住地とそうでない場所とが歴然と分別された土地利用がなされていたことがわかる。

調査範囲内では、10世紀代の掘立柱建物は全く検出されておらず、竪穴建物のみであるが、60棟を超える数が検出されており、集落の最盛期と見られる。8・9世紀と同様、竪穴建物は、調査区の南東部に極めて濃密に分布しているが、北西部にも継続して造られている。古墳群が所在する場所にも竪穴建物の進出が見られるようになり、前代以来の墓域の概念が薄れてきたものと見られる。

これら古代の遺構群の重複関係や出土遺物の検討から、この遺跡では7世紀末から11世紀前半までの間に4～5世代に亘る人々の営みが積み重ねられていたことが判明した。

このほか、今回調査地点の北東約0.25kmに位置する寺家前遺跡(5)からは当該期の遺物集中箇所が検出され、祭祀が行われた跡である可能性が考えられている。また、約0.6km北西に位置する下瀨名・掘込遺跡(11)、約0.55km北に位置する上瀨名・下境遺跡、約0.28km北西に位置する下瀨名・本郷遺跡(10)、約0.25km北に位置する下瀨名遺跡No.12地点、約0.2km北西に位置する明神遺跡、約0.2km南西に位置し、大國神社境内の南側に隣接する下瀨名遺跡No.3地点、約0.4km南に位置する下瀨名・高田遺跡(13)などから当該期の竪穴建物が検出されている。

6. 中世

(1) 瀨名荘

当該箇所は、中世瀨名荘の故地に当たる。佐位郡のほぼ全域が荘域であったことから、佐位荘とも称されていた。瀨名荘は「仁和寺法金剛院領目録」にみえる荘園で、同院の創建が大治5(1130)年であることから、その前後

に仁和寺領として成立したとみられている。後年の法金剛院文書には、「百九十九町五段廿五代、高十八町二段十代」と記されている。ほぼ同時期に成立、存在した著名な上野国内の荘園である新田荘に較べると郷数はほぼ同じながら田畠数は約半分に過ぎない。

瀨名荘については史料が少なく、成立過程は明らかではないが、10世紀の平将門の乱を鎮圧した地方軍事貴族・藤原秀郷の6代後裔である藤原兼行が、11世紀後半に佐位郡瀨名郷に土着し、その子孫である藤姓足利氏が開発に関わったものと考えられている。

藤姓足利氏の没落後、鎌倉幕府の有力御家人であった中原季時や北条実時らが地頭を務めていたことが史料に見えるが、鎌倉時代後期の弘安8(1285)年11月17日に勃発した幕府内の権力闘争である霜月騒動を機に支配権が北条得宗家に移る。

室町時代に入ると、幕府によって領家職が伊豆山権現の別当寺である走湯山密蔵院に寄進されるが、在地武士団の大島氏や赤堀氏、あるいは関東管領上杉氏などの勢力が強く、本所である仁和寺、領家である密蔵院の支配権は有名無実と化していったと考えられている。

なお、この荘園内の赤石郷が、戦国時代に由良成繁によって神宮に寄進されたことが、「伊勢崎」の地名のおこりと言われている。

(2) 中世の遺跡

本調査時点の北約0.8kmに位置する上瀨名遺跡Ⅰ～Ⅴ地点では、中世の竪穴状遺構、地下式坑が検出されている。

本調査地点の西側に近接する下瀨名塚遺跡の調査範囲内においては、『群馬県古城古墳址の研究』で山崎一氏が指摘された一辺約170mに及ぶ中世方形居館・瀨名館の所在が想定されていた。山崎氏は、この地に、瀨名荘を開発した在地豪族である秀郷流藤原氏の藤原兼行を祖とする瀨名氏の居館を想定された訳である。

実際、上武道路建設に先立って当事業団が実施した発掘調査において、大小の堀や溝が幾重にもめぐらされた一辺最大で約50mに及ぶ方形の区画と、それらの内部や周囲を区画する溝など、計13条の大小の堀・溝が検出された。検出された堀・溝の中で最大規模のⅥ5号溝は、最大幅5.9m・深さ2.9mの断面逆台形状を呈する巨大な堀で、方形区画の外郭溝と見られる。方形区画の内部溝

であるVI 1号溝も最大幅5.3m・深さ1.6mの断面が葉研状を呈する堀である。この状況から、中世の方形居館に伴う遺構であることには違いないものの、堀や溝から出土した遺物は16世紀代のものを中心に、瀬名荘開発に携わった秀郷流藤姓足利氏や瀬名氏の時代からはかなり下の時期のものである。

このほか、約0.55km北に位置する上瀬名・下境遺跡からは中・近世のものと思われる掘立柱建物、竪穴状遺構と溝、約0.28km北西に位置する下瀬名・本郷遺跡からは中世方形居館の一部、約0.25km北に位置する下瀬名遺跡No.12地点からは中世の掘立柱建物・竪穴状遺構・溝、約0.2km北西に位置する明神遺跡からは中世の土壌墓、約0.2km南西で、大國神社境内の南側に隣接する下瀬名遺跡No. 3地点からも中世方形居館の一部が、約0.4km南に位置する下瀬名・高田遺跡から竪穴建物、などの遺構が検出されている。

7. 近世

近世幕藩体制下、この地域は瀬名村と称された。「寛文朱印留」に「瀬名村」と見え、前橋藩領とされている。寛文郷帳では、「田方七百八十三石余、畑方六百四十石余」と見える。元禄郷帳では、「上瀬名村」・「下瀬名村」・「東新井村」の三箇村に分けて記されている。

元禄郷帳では、上瀬名村は「高三百五十五石余」で、「伊勢崎藩領」とある。近世後期の「御改革組合村高帳」では、「伊勢崎藩領」、「家数五十三」と、天保2(1831)年「伊勢崎領田畑寄」（上岡文書）では「反別田二十一町七反余、畑十九町六反余、新開田畑之内田五町余、畑十七町九反余、他山林五十町六反余、家数七十三、馬四十二疋」とある。天保郷帳では寛文郷帳と同様、三箇村併せて「瀬名村」と見える。水利は用水沼に頼るところが大きく、「伊勢崎領田畑寄」には、「大沼」、「下谷境沼」、「四郎兵衛沼」などの沼名が見える。

瀬名村の東側に位置する東新井村も、寛文郷帳ではともに「瀬名村」に含まれているが、元禄郷帳には村名が見え、「高二百九十石余」、「伊勢崎藩領」とある。近世後期の「御改革組合村高帳」では、「伊勢崎藩領」、「家数三十」と、天保2(1831)年「伊勢崎領田畑寄」（上岡文書）では「反別田十二町七反余、畑十一町九反余、新開田畑之内田一町四反余、畑十一町九反余、家数四十一、馬十七疋」とある。

天保郷帳では寛文郷帳と同様、三箇村併せて「瀬名村」と見える。水利は用水沼に頼るところが大きく、「伊勢崎領田畑寄」には、「山中沼」、「中ノ沼」、「上ノ沼」などの沼名が見える。当地は地下水が浅く、湿地帯であり、北部の矢ノ原も湿地帯のため開発が遅れ、上・下瀬名村と当村の三箇村の人会秣場となっていたが、天明8(1788)年、三箇村の百姓380軒が合同で矢ノ原の地「三十一町七反余」を新開発し、「一軒前二付十五歩宛割取」している。その後、享和3(1803)年にも再開発をしたことが、「伊勢崎風土記」に見える。

上瀬名村の南に位置する下瀬名村も元禄郷帳に、「高八百二十二石」、「伊勢崎藩領」とある。近世後期の「御改革組合村高帳」では、「伊勢崎藩領」、「家数百五十二」と、天保2(1831)年「伊勢崎領田畑寄」（上岡文書）では「反別田四十七町三反余、畑五十四町一反余、新開田畑之内田四町六反余、畑四十七町四反余、家数二百十一、馬八十一疋」とある。天保郷帳では寛文郷帳と同様、三箇村併せて「瀬名村」と見え、同村の中心であった。水利は用水沼に頼るところが大きく、「伊勢崎領田畑寄」には、「西新井沼」、「東沼」、「小斎境沼」などの沼名が見える。

現在までのところ、本調査地点周辺の遺跡からは、確実と見られる近世の遺構は殆ど発見されていない。

本調査地点から約0.2km北西に位置する明神遺跡からは近世の土坑、約0.4km南に位置する下瀬名・高田遺跡からは近世の井戸が、それぞれ検出されている。

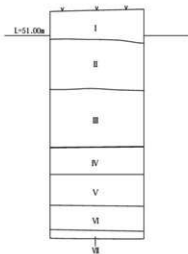
第3節 基本土層

先述したように、事業地内には、地表面に0.1～0.15m程の厚さで碎石が敷かれており(Ⅰ層)、その下層に厚さ0.3～0.4m程の頻繁に耕起されたオリブ褐色を呈する耕作土が堆積していた(Ⅱ層)。

さらにその下層には、狭い溝状に細長く耕地を掘削するトレンチャーあるいはディッチャーと称される農業機械によってローム層に達する深さまで広範囲に攪拌されたオリブ褐色を呈する耕作土の層が、0.15～0.25m程の厚さで堆積していた(Ⅲ層)。

表土である碎石(Ⅰ層)と、頻繁に耕起された耕作土(Ⅱ層)、及び農業機械によって攪拌された層(Ⅲ層)を除去し、農業機械によって掘削された狭い溝の間に残されたローム層の上面を遺構確認面としたが、土層断面の中で、元々、遺構が掘り込まれた位置、すなわち当時の生活面を明らかにすることは出来なかった。

遺構は、農業機械によって細長く溝状に掘削された部分の間の、辛うじて掘削を免れた部分のローム層の上面で確認せざるを得ない状態であった。



第6図 基本土層模式図

Ⅰ層 碎石層。

Ⅱ層 2.5YR4/3 オリブ褐色土。

頻繁に耕起された耕作土。黄褐色ローム塊と浅黄褐色ローム塊をやや多く含む。

Ⅲ層 2.5YR4/3 オリブ褐色土。

2層に較べてローム塊は大きい。農業機械により攪拌された土層。農業機械の掘削深度の差異により、黄褐色及び浅黄褐色ローム塊の含有率が異なる。

Ⅳ層 10YR5/8 明黄褐色ローム層。

固く締まる。浅間板鼻褐色テフラ(As-BP group)相当。

Ⅴ層 10YR5/8 黄褐色ローム層。

締まりやや強い。

Ⅵ層 7.5YR/6 褐色ローム層。

粘性強く、締まりやや強い。暗色帯相当。

Ⅶ層 7.5YR/2 灰白色ローム層。

粘性強く、締まりやや強い。径3mm程度の白色軽石を少量含む。

第2章参考文献

- 伊勢崎市教育委員会編2008 『下関名道跡』Ⅵ
 伊勢崎市教育委員会編2010 『下関名道跡』Ⅻ
 伊勢崎市教育委員会編2013 『下関名道跡』Ⅼ
 大間々屈状地研究会編2010 『群馬県大間々屈状地の地域と景観—自然・考古・歴史・地理—』
 尾崎喜佐雄監修1987 『日本歴史地名大系10 群馬県の地名』平沢社
 角川日本地名大辞典編纂委員会編1988 『角川日本地名大辞典10 群馬県』角川書店
 群馬県編1938 『上毛古墳総覧』
 群馬県編2017 『群馬県古墳総覧』
 群馬県教育委員会編1988 『群馬県の中世城跡跡』
 群馬県史編纂委員会編1981 『群馬県史』資料編3
 群馬県史編纂委員会編1986 『群馬県史』資料編2
 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業1991 『下関名塚塚道跡』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業1998 『年報』37
 埴町教育委員会編1975 『明神道跡発掘調査報告書』
 埴町教育委員会編1978 『下関名道跡発掘調査報告書』
 埴町教育委員会編1984 『昭和58年埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 寺家前道跡・明神道跡』
 埴町教育委員会編2002 『下関名・高田道跡』
 埴町編1996 『埴町史3 歴史篇』上
 山崎一1972・1978 『群馬県古城址地の研究』上・下
 マッピングぐんま
<http://mapping-gunma.pref-gunma.jp/pref-gunma/top>

第3章 検出された遺構と遺物

はじめに

今回の発掘調査地点は、群馬県伊勢崎市境下湖名に所在し、国道17号バイパス上武道路と一般県道伊勢崎新田上江田線との大國神社交差点の北東側に位置し、一般県道伊勢崎新田上江田線の北側に面した道路拡張部分の北西-南東方向に細長い、長さ約50m・幅約4m・面積196㎡の狭小な範囲が発掘調査の対象となった。

南北約2.5km・東西約1kmに及ぶ下湖名遺跡群の範囲内では土地改良、圃場整備、公共及び民間開発、上武道路建設等に伴って当時の境町教育委員会、現在の伊勢崎市教育委員会、当事業団等によって総計14次に亘って発掘調査が行われてきた(第1表)。今回の発掘調査は下湖名遺跡群内では第15次目の発掘調査ということになる。これまでの境町教育委員会、伊勢崎市教育委員会、当事業団等による発掘調査によって、本遺跡の範囲では、主に、古墳時代から平安時代の集落、古墳、中世の方形居館の掘割や区画溝、中世の建物跡、竪穴状遺構などの遺構が検出されている。

古代律令制下には上野国佐田郡湖名郷、古代末期～中世にかけては古代以来の佐田郡の部域そのものが一つの荘園として成立した湖名荘の故地にそれぞれ該当する地域であり、遺跡が濃密に分布している場所である。

今回の調査地点は、農業機械を使用した近・現代の耕作によって、深く、細長く、溝状に地中深くまで掘り返されており、その耕作溝の間隔に僅かに遺された遺構を検出、調査した。

耕作機械によって深くまで掘り返され、攪拌された耕作土の中には粉砕された土器片が含まれており、掘り込みの浅い遺構などは全く痕跡が残っていない可能性も高く、多くの遺構・遺物が近・現代の耕作によって失われてしまったものと推測出来る。しかしながら、調査対象範囲のほぼ全域から遺構は検出されており、今回調査地点の周辺において、これまでに多く検出されてきた古墳時代後期～古代集落の一部であったことは間違いないようである。

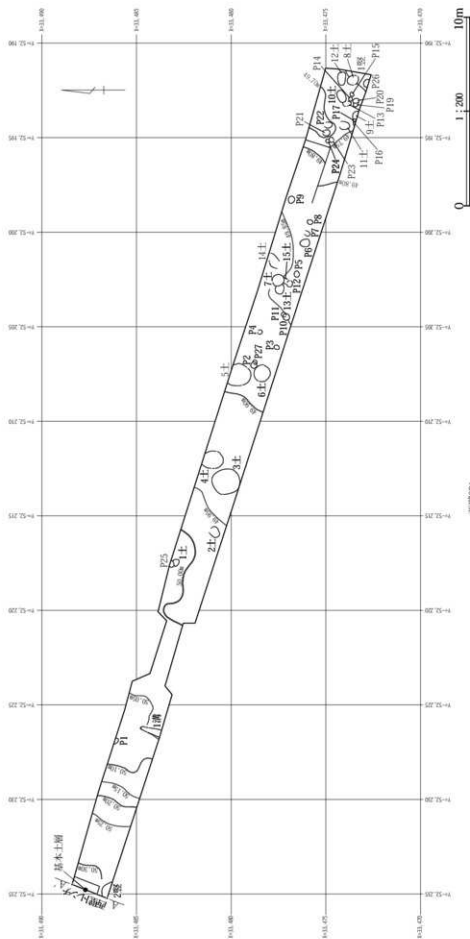
今回の発掘調査に拠って検出された遺構は、平安時代のものと考えられる竪穴建物(検出できたのはいずれもごく一部)が2棟分と古代から中世にかけての溝1条、土坑15基、ピット26基である。

Y=52215ライン以西では遺構の検出は急に少なくなり、Y=52220から調査区西端のY=52235ラインまでの約15mの間からは2号竪穴建物、1号溝、1号ピットの3基の遺構しか検出されなかった。調査範囲内では、遺構が比較的濃密に分布しているのは南東側約半分の部分である。

調査区の南東寄りから検出された6号ピットの底面付近からは北宋銭の大観通宝(1107年初鑄)が1点出土したため、このピットは中世のものである可能性が高いが、それ以外の溝1条、土坑15基、ピット25基から出土した遺物の量は非常に少なく、また、遺物が出土した事例であっても、いずれも小破片であったため、実測に堪えるような土器・陶器片はほぼ皆無と言って良い状態であった。そのため、各遺構の正確な年代については不明確な点もあるが、今回の調査においては、遺構外から出土したものを含めて、出土した土器片の年代は、遺構外から出土した縄文時代前期前半の土器片1点、弥生時代中期の甕の小破片1点、中世の焼締陶器小片1点、近世の施釉陶器小片1点を除いた他は古代のものであったので、正確な年代が不明な溝、土坑、ピットの年代も、概ね古代のものともみてよいだろう。

第3表 検出遺構数一覧表

	検出数	時期
竪穴建物	2	平安時代前期～中期
溝	1	古墳時代～中世
土坑	15	古墳時代～平安時代
ピット	26	古墳時代～中世



西塚SPA

I 卵石

II オリーブ褐色(土.53R1/3) 黄褐色ロームブロックと浅黄褐色ロームブロックをやや多く含む。

幸面に比べブロック小さく、隙間に研滅された細作土とみられる。

III オリーブ褐色(土.53R1/3)。

ロームブロックの含有率は異なる。

※目にはブロック人さし、断面による根持土、根元の根起深底の差違から黄褐色ロームブロック及び浅黄褐色

(分測した個別の注記はしていない。)

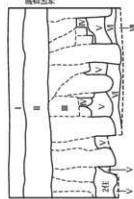
IV 明黄褐色ローム(103R6/9) 固く締まる(Ac-IP group相当)。

V 黄褐色ローム(107R5/8) 締まりやや強い。

VI 褐色ローム(7.33R4.6) 粘性強い、締まりやや強い(棕色群相当)。

VII 灰白色ローム(7.33R2.2) 粘性強い、締まりやや強い、径3mm程度の白色軽石を少量含む。

A-A' 1-51.30m 西塚セクション



第7図 下瀬名遺跡調査区全体図

第1節 竪穴建物

本遺跡今回調査地点から検出された竪穴建物は計2棟で、いずれも調査区の東西両側からごく一部に当たる部分が検出されたに過ぎない。近・現代の耕作によって、上面を大きく削平されており、掘り込みもごく浅くしか検出出来なかった。

とくに、調査区東端から検出された1号竪穴建物は近・現代の耕作によって甚だしく破壊されており、検出されたのは竪穴建物の掘り方の残骸の断片と言っても良い状態であり、形状及び土層断面の状況から竪穴建物と判断されたという程度である。

検出された土坑やピットもほぼすべてが耕作によって破壊されており、部分的に検出されたものが多く、中には竪穴建物の柱穴や貯蔵穴であったものが含まれている可能性も存在するが、検出状況からその点を明確に出来るようなものは皆無であった。

1号竪穴建物(第8図、PL.4)

位置 調査区南東隅にかかる。X-33472~473、Y-52191~192。

重複 8号土坑に掘り込まれる。26号ピットと重複しているが、新旧関係は不明である。上面を近・現代の耕作により大きく攪乱されている。

平面形状 竪穴建物の西端のごく一部が検出されたにすぎず、不明。

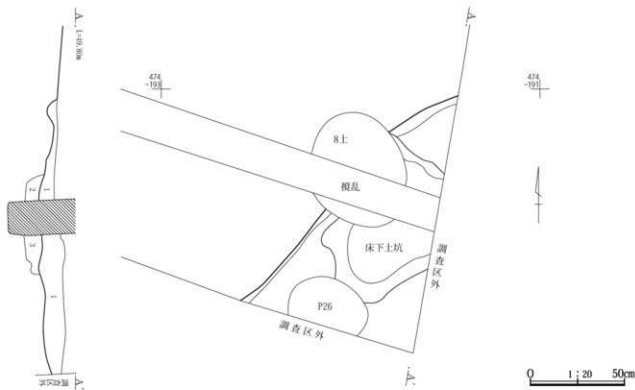
主軸方位 検出範囲が狭小なため計測不能。

規模 検出長径1.38m、検出短径0.95m、床面までの深さ約0.11m、掘り方までの深さ0.21m。

面積 検出範囲が狭小なため計測不能。

埋土 炭化物、焼土粒、黄褐色ローム塊を多く含む、しまりの弱い黒褐色土。

床面 地山を掘り込んで、平坦な床面を形成しており、床面と掘り方とがほぼ一致しているが、硬化面は全く検出出来なかった。床面の標高は49.64~65m前後である。竪穴建物検出範囲のほぼ中央で不整楕円形状を呈する床



1号竪穴建物

- 1 黒褐色土(7.5YR3/1) 炭化物、焼土粒を多く含む。黄褐色ロームブロックを多く含む。締まり強い。
- 2 暗褐色土(10YR3/3) 炭化物、焼土粒をやや多く含む。浅黄褐色ロームブロックをやや多く含む。締まりやや強い。(掘り方)
- 3 黒褐色土(7.5YR3/1) 黄褐色ロームブロックを非常に多く含む。締まりやや強い。(掘り方)

第8図 1号竪穴建物

下土坑が検出された。

竪 調査範囲内では検出されなかった。

貯蔵穴 調査範囲内では検出されなかった。

床下土坑 本竪穴建物検出範囲のほぼ中央部から検出された。竪穴建物全体からみれば、北西寄り、西壁際に位置するものと推測出来る。

西側を8号土坑によって掘り込まれ、また、北寄りの部分を近・現代の耕作によって、それぞれ破壊されている。東側は調査区外に出る。そのため、全容は不明である。規模は、検出長軸0.71m、検出短軸0.58m、深さ0.10mである。

埋土は、炭化物、焼土粒、浅黄橙色ローム塊をやや多く含み、締まりやや強い暗褐色土と黄褐色ローム塊を非常に多く含み、締まりやや強い暗褐色土である。

柱穴 調査範囲内では検出されなかった。

周溝 調査範囲内では検出されなかった。

掘り方 床下土坑以外では床面と掘り方がほぼ一致している。

遺物 埋土中から土師器杯小片1点、土師器甕小片14点、須恵器杯小片2点、須恵器甕小片1点が出土した。いず

れも非掲載。

所見 調査区の南東隅にかかる。東側、南側それぞれ調査区外へと広がっている。

12号土坑のすぐ南側に隣接し、10号土坑及び13～15、19・20号ピットの東側に近接する。

竪穴建物の西辺のごく一部が検出された。近・現代の耕作によって著しく破壊されており、形状及び調査区壁の土層断面観察によって辛うじて検出された。

埋土中から出土した土師器・須恵器の小片は、実測可能なものは1点としてなかったが、いずれも平安時代前期9世紀頃のものだと判断できるものであった。

時期 平安時代前期、9世紀代。

2号竪穴建物(第9図、PL. 4・5)

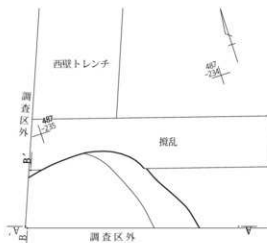
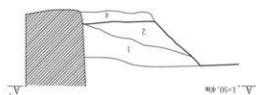
位置 調査区の南西隅にかかる。X=33486、Y=52234～235。

重複 遺構との重複はないが、北側を近・現代の耕作により溝状に破壊されている。

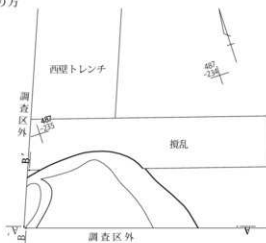
平面形状 竪穴建物の北東隅部のごく一部が検出されたにすぎず、不明。

2号竪穴建物

- 1 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 黄褐色ロームブロックを非常に多く含む。黒褐色土(5YR2/2)ブロックを少量含む。締まりやや強い。
- 2 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 黄褐色ロームブロックをやや多く含む。締まりやや強い。
- 3 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 黒褐色土(5YR2/2)ブロックを多く含む。黄褐色ロームブロックをやや多く含む。締まりやや強い。(西壁SPAにあり)
- 4 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 黄褐色ロームブロック、黒褐色土ブロックを多く含む。締まり非常に強い。(掘り方)



掘り方



第9図 2号竪穴建物

第3章 検出された遺構と遺物

主軸方位 検出範囲が狭小なため計測不能。

規模 検出長径0.92m、検出短径0.4m、床面までの深さ0.35m前後、掘り方までの深さ0.4~0.5m前後。

面積 検出範囲が狭小なため計測不能。

埋土 暗灰黄褐色土をベースとする。上層に黄褐色ローム塊を非常に多く含み、黒褐色土塊を少量含む、締まりがやや強い暗灰黄褐色土と、黒褐色土塊を多く含み、黄褐色ローム塊をやや多く含む、締まりがやや強い暗灰黄褐色土とが堆積している。東壁際には黄褐色ローム塊をやや多く含み、締まりがやや強い暗灰黄褐色土が三角形に堆積している。貼床は黄褐色ローム塊及び黒褐色土塊をやや含み、締まりが非常に強い暗灰黄褐色土。

床面 地山を比較的平坦に掘り込んだ上に、黄褐色ローム塊及び黒褐色土塊をやや含み、締まりが非常に強い暗灰黄褐色土を約0.05~0.11m程貼り付けて、硬く締まった平坦な床面を形成している。

竈 調査範囲内では検出されなかった。

貯蔵穴・床下土坑 調査範囲内では検出されなかった。

柱穴 調査範囲内では検出されなかった。

周溝 調査範囲内では検出されなかった。

掘り方 地山を比較的平坦に掘り込んでいる。掘り方面の標高は50.02~04m前後である。

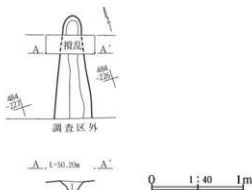
遺物 埋土中から土師器甕小片13点が出土。いずれも非掲載。

所見 調査区の南西隅にかかる。西側、南側それぞれ調査区外へと広がっている。周辺からは遺構は全く検出されなかった。竪穴建物の北東隅部のごく一部が検出された。近・現代の耕作によって破壊されているが、残存状態は1号竪穴建物よりも良好で、硬く締まった床面の一部や、一部で壁の立ち上がりも確認することが出来た。埋土中から出土した土師器甕小片は、実測可能なものは皆無であったが、いずれも平安時代前期9世紀頃のものとして判断できるものであった。

時期 平安時代前期、9世紀代。

第2節 溝

本遺跡の今回調査地点では、溝は調査区の西寄りの位置から1条のみが検出された。調査地点周辺の遺跡から



1号溝

1 暗灰黄色土(2.5YR4/2) 黄褐色ロームブロックを多く含む。締まり弱い。

第10図 1号溝

は、中世方形居館の掘割や区画溝、用・排水路と見られる堀や溝が数多く検出されているにもかかわらず、僅か200㎡弱の狭小な範囲における調査とはいえ、溝が1条しか検出されなかったことは想定外であった。

1号溝(第10図・PL.5)

位置 調査区西寄り。X=33483~484、Y=52226。

重複 遺構との重複は無いが、北端付近を近・現代の耕作により溝状に破壊されている。

主軸方位 N-17°-E。

規模 検出長1.08m、幅0.20~0.40m、深さ0.02~0.11m。

埋土 黄褐色ローム塊を多く含み、締まりが弱い暗灰黄褐色土。

遺物 なし。

所見 調査区西寄りに位置する。南端は調査区外に伸びている。北端側に行くにしたがって細く狭まっており、北端はX=33485ラインの手前で止まる。比較的しっかりとした掘り方を有しており、断面は逆台形状を呈する。規模・形状から見て中世方形居館の掘割や区画溝、水田に伴う用・排水路とは看做し難い。

時期 今回の調査においては、遺構外から出土したものを含めて、出土した土器・陶器小片の年代はほとんどのものが平安時代前・中期頃のものであったため、概ねその時期のものとして見て間違いのないだろうが、遺構の重複も無く、出土遺物も皆無であり、正確な時期は不明である。

第3節 土坑

本遺跡では15基の土坑が検出された。土坑は調査区の南東側の約2/3の範囲、Y=52220ライン以东からのみ検出された。概ね、長径0.6～1m前後、短径0.4～1m前後、深さ0.06～0.6m程度の規模で、平面形状は概ね楕円形状である。

今回の調査においては、遺構外から出土したものを含めて、出土した土器・陶器小片の年代はほとんどのものが古代のもので、とりわけ平安時代前・中期9～10世紀ごろのものが多かったため、概ねその時期のものとしてほぼ間違いないものと思われる。ただし、今回調査地点から検出された土坑の埋土中から出土した遺物は、いずれも近・現代の耕作による攪乱を受けて粉砕された小片であり、出土点数も少なく、遺構の底面付近から出土したのも皆無であった。また、出土した古墳時代～中世の土器・陶器類の中で実測・図化が可能なものも皆無であった。そのため、各土坑の年代を決定する上での根拠となるようなものはないため、各土坑の正確な年代を決定することは難しい状況であった。

土坑やピットの多くは、近・現代の耕作によって破壊されており、部分的にしか検出出来なかったものが多い。先述したように、中には堅穴建物の柱穴や貯蔵穴、床下土坑であったものも存在しているが、明確には出来なかった。

特徴的な点は、埋土中に自然礫が含まれるものいくつか存在していたことである。特に6号土坑の埋土中に多く含まれた片岩やチャートは、本遺跡周辺地域からは産出しない石材であり、他所からもたらされたものと考えられる。

1号土坑(第11図・PL.5)

位置 調査区中央からやや北西に寄った位置の北壁際。X=33482～483、Y=52217。

重複 25号ピットに北西辺の一部を掘り込まれる。

平面形状 北西-南東方向にやや長い楕円形状を呈する。

主軸方位 N-16°-W。

規模 長径0.37m、短径0.40m、深さ0.08m。

埋土 黄褐色ローム塊を非常に多く含み、締まりが強い

黒褐色土。

遺物 埋土中より土師器甕小片2点が出土。非掲載。

所見 調査区中央からやや北西に寄った位置の北壁際に位置する小規模で浅い土坑。北西側を25号ピットに掘り込まれているが、周辺では遺構は全く検出されておらず、南東側に位置する2号土坑とは約2.2mも離れて存在している。断面は、浅く、上が広く開いた逆レンズ状を呈する。

時期 平安時代前・中期ごろか。

2号土坑(第11図、PL.5)

位置 調査区の中央からやや北西寄りの位置。X=33480～481、Y=52215～216。

重複 遺構との重複は無いが、北東側を近・現代の耕作によって東西に溝状に破壊されている。

平面形状 北東-南西方向にやや長い不整楕円形状を呈する。

主軸方位 N-51°-E。

規模 長径0.55m、短径0.50m、深さ0.06m。

埋土 黄褐色ローム塊を少量含み、締まりが弱い暗灰褐色土。

遺物 埋土中より土師器甕小片2点が出土。非掲載。

所見 調査区の中央からやや北西寄りに位置する。掘り方は浅く、断面は下部が広く扁平な逆レンズ状を呈する。

時期 平安時代前・中期ごろか。

3号土坑(第11図・PL.6)

位置 調査区のほぼ中央から僅かに北西寄りに位置する。X=33479～481、Y=52212～213。

重複 遺構との重複は無いが、中央付近を近・現代の耕作によって東西に溝状に破壊されている。

平面形状 南北に長い楕円形状を呈する。

主軸方位 N-18°-E。

規模 長径1.50m、短径1.38m、深さ0.30m。

埋土 上層に黄褐色ローム塊を非常に多く含み、締まりがやや強い暗灰褐色土、下層に黄褐色と浅黄褐色のローム塊を主体とし、暗灰褐色土を含む層がレンズ状に堆積している。

遺物 埋土中から土師器甕小片16点、須恵器杯小片1点が出土。非掲載。

第3章 検出された遺構と遺物

所見 調査区のほぼ中央から僅かに北西寄りに位置し、南西端は調査区南壁に接する。4号土坑のすぐ南西側に隣接する。しっかりと掘り方を有し、中央部が一段と深く掘り窪められ、同心円状に深くなっている。断面は中央底部が窪んだ逆レンズ状を呈する。

時期 平安時代前・中期ごろか。

4号土坑(第11図・PL.6)

位置 調査区のほぼ中央に位置する。X=33480~481、Y=52211~212。

重複 遺構との重複は無いが、中央から南側を近・現代の耕作によって溝状に破壊されている。

平面形状 南北に長い楕円形状を呈するものと思われる。

主軸方位 N-5°-W。

規模 検出長径0.98m、短径0.95m、深さ0.24m。

埋土 上層に黄褐色ローム塊を多く含み、締まりが強い黒褐色土、中層に黄褐色ローム塊を多く含み、締まりが強い暗灰褐色土、下層底面付近には黄褐色と浅黄褐色のローム塊を主体とし、暗灰褐色土を含む層が堆積し、壁際には黄褐色ローム塊を主体とし、暗灰褐色土を含む締まりが強い土層が三角形に斜めに堆積している。

遺物 埋土中から土師器甕小片6点、須恵器杯小片2点が出土。非掲載。

所見 調査区のほぼ中央に位置し、北端は調査区北壁外に出る。3号土坑のすぐ北東側に隣接する。しっかりと掘り方を有し、断面は上面が大きく広がった逆台形状を呈する。

時期 平安時代前・中期ごろか。

5号土坑(第11図・PL.6)

位置 調査区のほぼ中央から僅かに南東寄りに位置する。X=33478~480、Y=52206~208。

重複 遺構との重複は無いが、北端付近と中央から南寄りの位置を近・現代の耕作によって東西に溝状に破壊されている。

平面形状 南北に長い楕円形状を呈するものと思われる。

主軸方位 N-4°-E。

規模 検出長径1.10m、短径1.18m、深さ0.55m。

埋土 上層に黄褐色ローム塊をやや多く含み、締まりがやや強い黒褐色土および締まりがやや強い黒褐色土と黄褐色ローム塊との混土、下層に黄褐色と浅黄褐色のローム塊を主体とし、黒褐色土を少量含む締まりがやや強い層が堆積している。

遺物 埋土中から土師器甕小片4点、自然礫8点が出土。非掲載。

所見 調査区のほぼ中央から僅かに南東寄りに位置し、北端は調査区北壁外に出る。6号土坑のすぐ北西側に隣接する。しっかりと掘り方を有し、断面は上面が広がった逆台形状を呈する。

時期 平安時代前・中期ごろか。

6号土坑(第11~13図・PL.6・7・17)

位置 調査区のほぼ中央から僅かに南東寄りに位置する。X=33477~478、Y=52207。

重複 遺構との重複は無いが、土坑の中央からやや北寄りの位置を近・現代の耕作によって東西に溝状に破壊されている。

平面形状 ほぼ円形状を呈する。

主軸方位 N-33°-W。

規模 径0.86~0.88m、深さ0.49m。

埋土 上層に黄褐色ローム塊を少量含み、締まりがやや強い黒褐色土、中層に黄褐色ローム塊をやや多く含み、締まりがやや強い黒褐色土、下層に黄褐色ローム塊をやや多く含み、締まりが弱い黄灰色土がレンズ状に堆積している。埋土中には径10~20cm程度の礫を多く含む。

遺物 埋土中から土師器杯小片3点、同甕小片3点が出土した。非掲載。

また、埋土中から計8点の石製品・剥片類が出土した。2は、粘板岩で、現存長18.2cm、現存幅16.2cm、厚さ1.9cm、重量597.8gで、形態的特徴から石鎌の約1/2片である可能性が考えられる。薄い層状構造が発達した石質であり、剥離面の特徴を観察することが難しい。左側辺全体と右側辺の一部の剥離面は二次加工痕と判断した。二次加工痕は表面側への片面加工である。

1・3・4・6・7の二次加工がある粘板岩剥片は、いずれも薄い層状構造が発達した石質で、大形剥片を素材として縁辺部に二次加工痕が散在している。長さは11~26cm前後、幅は7~25cm前後、重さは335~3300g前後

と大きさもまちまちではあるが、打製石斧あるいは石鎌の加工途上のものであるいはその破損品の可能性が考えられる。

5の砂岩の磨石は、完存で、長さ15.5cm、幅7.0cm、厚さ5.0cm、重さ765.5g。表裏面と左側面に磨面が認められ、左右両側面と下端面には敲打痕が集中する。

これらの他に、非掲載であるが、チャート礫片1点が出土しており、遺構外からの出土ではあるが、本土坑付近からは、粘板岩の二次加工がある剥片1点も出土している。

粘板岩やチャートは周辺地域では本来産出しない石材であり、他所から持ち込まれたものと考えられる。

所見 調査区のはぼ中央から僅かに南東寄りに位置し、5号土坑のすぐ南東側に隣接する。非常にしっかりとした掘り方を有し、断面は逆台形状を呈する。

粘板岩の石鎌あるいは石鎌の未製品とも考えられる粘板岩の二次加工がある剥片などを含む計8点の石材が出土しており、付近の遺構外からも二次加工がある粘板岩の剥片が1点出土していること、出土した粘板岩にせよ、チャートにせよ本遺跡周辺地域からは産出しない、他の場所からわざわざ持ち込まれたと考えられる石材であることなどを勘案すると、付近に石製品の製作・加工を行った工房の存在が想定できる。

時期 平安時代前・中期ごろか。

7号土坑(第14図・PL.7)

位置 調査区の南東寄りの中央部に位置する。X-33477、Y-52202。

重複 13号土坑及び15号土坑を掘り込む。また土坑の北寄りの位置を近・現代の耕作によって東西に溝状に破壊されている。

平面形状 ほぼ円形状を呈する。

主軸方位 N-22°-E。

規模 径0.60~0.63m、深さ0.60m。

埋土 上層に黄褐色ローム塊を少量含み、締まりがやや強い灰黄褐色土、中層に黄褐色ローム塊を非常に多く含み、締まりがやや強い灰黄褐色土、下層に黄褐色ローム塊を少量含み、締まりがやや強い灰黄褐色土が堆積している。埋土中には径10~20cm程度の礫を含む。

遺物 埋土中から土師器甕小片2点、須恵器甕小片1点、

角閃石安山岩礫が出土。非掲載。

所見 調査区の南東寄りの中央部に位置し、14号土坑のすぐ南西側、12号ピットの北側に隣接し、5号ピットの北西側に近接する。非常にしっかりとした掘り方を有し、断面は深い逆台形状を呈する。

埋土中より、被熱した痕跡を有する、加工されていない角閃石安山岩礫が出土しており、竪穴建物の竈の構築材に使用された部材が廃棄されたものと考えられる。

時期 平安時代前・中期ごろか。

8号土坑(第14図・PL.8)

位置 調査区の南東端付近に位置する。X-33473、Y-52191~192。

重複 1号竪穴建物の西辺を掘り込む。また土坑の南寄りの位置を近・現代の耕作によって東西に溝状に破壊されている。

平面形状 北西-南東方向にやや長い楕円形状を呈する。

主軸方位 N-10°-W。

規模 長径0.62m、短径0.50m、深さ0.11m。

埋土 炭化物を非常に多く、焼土粒を少量含み、締まりが弱い灰黄褐色土。

遺物 なし。

所見 調査区の南東端付近に位置し、12号土坑のすぐ南側に隣接し、26号ピットの北側、10・14・15・20号ピットの東側に近接する。断面は浅く、扁平で、上面が大きく広がった逆台形状を呈する。埋土中に炭化物を多量に、焼土を少量含んでいるが、竪穴建物の竈が付近に存在したとは考えにくい。用途不明。

時期 平安時代前・中期ごろか。

9号土坑(第14図・PL.8)

位置 調査区の南東寄りに位置する。X-33473、Y-52193~194。

重複 16・17号ピットに北西側を掘り込まれる。

平面形状 南側大半が調査区外に出るため不明である。

主軸方位 N-60°-E。

規模 検出長径0.41m、検出短径0.55m、深さ0.11m。

埋土 炭化物を少量含み、締まりが強い灰黄褐色土。

遺物 埋土中より土師器甕小片5点が出土。非掲載。

所見 調査区の南東端付近に位置し、11号土坑のすぐ南

第3章 検出された遺構と遺物

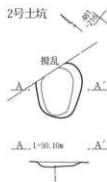
1号土坑



1号土坑(25号ピットに切られる)

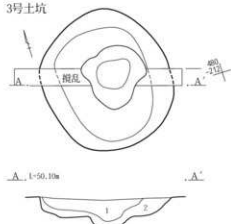
- 1 黒褐色土(2.5Y3/1) 黄褐色ロームブロックを非常に多く含む。締まり強い。

2号土坑



- 2 暗灰褐色土(2.5Y4/2) 黄褐色ロームブロックを少量含む。締まり強い。

3号土坑



3号土坑

- 1 暗灰褐色土(2.5Y4/2) 黄褐色ロームブロックを非常に多く含む。締まりやや強い。
- 2 黄褐色ロームブロックと浅黄褐色ロームブロックを主体とし、暗灰褐色土を含む。

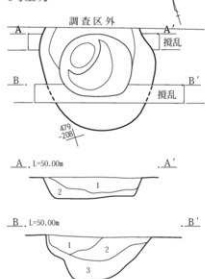
4号土坑



4号土坑

- 1 黒褐色土(2.5Y3/1) 黄褐色ロームブロックを多く含む。締まりやや強い。
- 2 暗灰褐色土(2.5Y4/2) 黄褐色ロームブロックを多く含む。締まりやや強い。
- 3 黄褐色ロームブロックを主体とし暗灰褐色土を含む。締まりやや強い。
- 4 3と同質。
- 5 黄褐色ロームブロックと浅黄褐色ロームブロックを主体とし暗灰褐色土を含む。締まり強い。

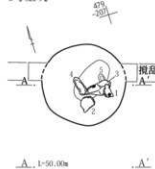
5号土坑



5号土坑

- 1 黒褐色土(7.5Y3/1) 黄褐色ロームブロックをやや多く含む。締まりやや強い。
- 2 黒褐色土と黄褐色ロームブロックの混上。締まりやや強い。
- 3 黄褐色ロームブロックと浅黄褐色ロームブロックの混上。黒褐色土を少量含む。締まりやや強い。

6号土坑

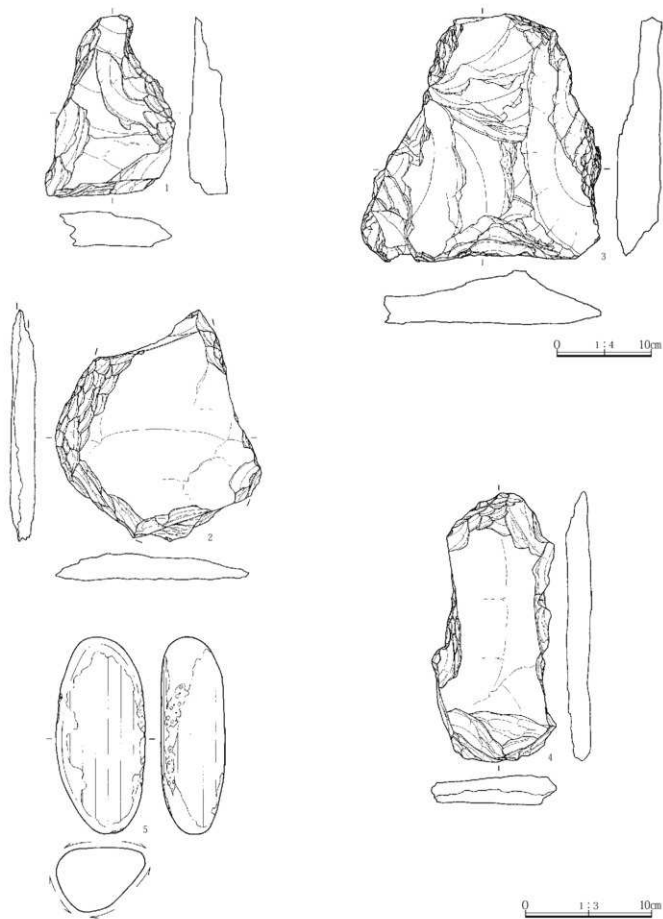


6号土坑

- 1 黒褐色土(10Y3/1) 黄褐色ロームブロックを少量含む。締まりやや強い。
- 2 黒褐色土(2.5Y3/1) 黄褐色ロームブロックをやや多く含む。締まりやや強い。
- 3 黄褐色土(2.5Y4/1) 黄褐色ロームブロックをやや多く含む。締まり弱い。

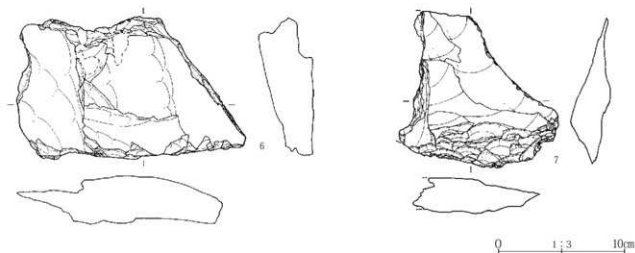
0 1:40 1m

第11図 1～6号土坑



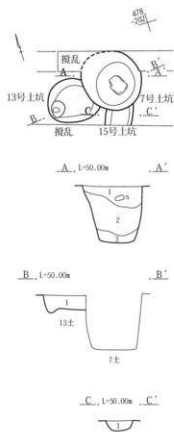
第12图 6号土坑出土遺物(1)

第3章 検出された遺構と遺物



第13図 6号土坑出土遺物(2)

7・13・15号土坑



7号土坑(13号土坑、15号土坑を切る)

- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 黄褐色ロームブロックを少量含む。締まりやや強い。
 - 2 灰黄褐色土(10YR4/2) 黄褐色ロームブロックを非常に多く含む。締まりやや強い。
 - 3 灰黄褐色土(10YR4/2) 黄褐色ロームブロックを少量含む。締まりやや強い。
- ※覆上に径10~20cmの礫を含む。角四石山岩もあり。

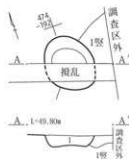
13号土坑(7号土坑に切られる)

- 1 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 黄褐色ロームブロックを多く含む。締まり強い。

15号土坑

- 1 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 炭化材、焼土粒をやや多く含む。黄褐色ロームブロックを多く含む。締まりやや強い。

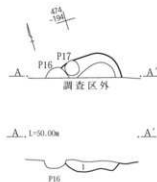
8号土坑



8号土坑(1号住居を切る)

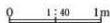
- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 炭化物を非常に多く含む。焼土粒を少量含む。締まり強い。炭化物を多量に含むが、カマドや炉とは考えられない。用途不明。

9号土坑



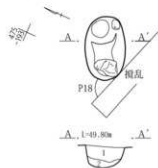
9号土坑(16号ビットに切られる、17号ビットと先後関係不明)

- 1 灰黄褐色土(16号ビットよりやや黒色味強い) 炭化物を少量含む。締まりやや強い。覆土中に径10cm程度の礫を含む。



第14図 7~9・13・15号土坑

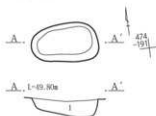
10号土坑



10号土坑

- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 浅黄褐色ロームブロックを少量含む。炭化物、焼土粒をやや多く含む。締まりやや強い。
2 灰黄褐色土と黄褐色ロームブロックの混土。締まりやや強い。
※ 1に礫を含む。

12号土坑



11号土坑

- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 黄褐色ロームブロックを多く含む。締まりやや強い。

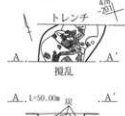
12号土坑

- 1 暗褐色土(10YR3/3) 黄褐色ロームブロックを多く含む。炭化物、焼土粒を多く含む。締まりやや弱い。

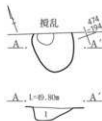
14号土坑

- 1 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 炭化材を多く含み、焼土粒を少量含む。黄褐色ロームブロックを多く含む。締まりやや強い。

14号土坑



11号土坑



0 1:40 1m

第15図 10～12・14号土坑

東側、19号ピットのすぐ西側に隣接し、13号ピットの西側に近接する。南側大部分が調査区外に出るため、詳細は不明な点が多い。断面は浅く、扁平で、上面が大きく広がった不整逆レンズ状を呈する。

時期 平安時代前・中期ごろか。

10号土坑(第15図・PL. 8)

位置 調査区の南東寄りに位置する。X-33473～474、Y-52192～193。

重複 13号ピットの北東側を掘り込む。また土坑の南東端の部分を近・現代の耕作によって東西に溝状に破壊されている。

平面形状 北東-南西方向に長い楕円形状を呈する。

主軸方位 N-65°-E。

規模 長径0.68m、検出短径0.42m、深さ0.27m。

埋土 浅黄褐色ローム塊を少量、炭化物・焼土粒をやや多く含み、礫を含んだ、締まりがやや強い灰黄褐色土を主体とし、下層の底面付近に締まりがやや強い灰黄褐色土とローム塊との混土が堆積する。

遺物 埋土中より土師器杯小片1点、同壺小片6点、須

恵器杯もしくは椀小片1点、同壺小片1点が出土。非掲載。

所見 調査区の南東端付近に位置し、14・15号ピットのすぐ北側、8・12号土坑のすぐ西側に隣接する。西端付近から径30cm弱の自然石塊が出土した。しっかりとした掘り方を有しており、断面は、上面がやや大きく広がった逆U字形状を呈する。

時期 平安時代前・中期ごろか。

11号土坑(第15図・PL. 8)

位置 調査区の南東寄りに位置する。X-33473～474、Y-52194。

重複 遺構との重複はないが、北側を近・現代の耕作によって東西に溝状に破壊されている。

平面形状 南北に長い楕円形状を呈していたものと思われる。

主軸方位 N-7°-E。

規模 検出長径0.42m、短径0.43m、深さ0.17m。

埋土 黄褐色ローム塊を多く含み、締まりがやや強い灰黄褐色土。

第3章 検出された遺構と遺物

遺物 埋土中より土師器甕小片2点が出土。非掲載。

所見 調査区の南東に位置し、9号土坑、16・17号ピットのすぐ北側に隣接する。断面は浅く、扁平で、上面が大きく広がった不整逆台形状を呈する。

時期 平安時代前・中期ごろか。

12号土坑(第15図・PL.9)

位置 調査区の南東端、東壁際に位置する。X=33473~474、Y=-52191~192。

重複 なし。

平面形状 東西に長い楕円形状を呈する。

主軸方位 N-84°-E。

規模 長径0.70m、短径0.41m、深さ0.18m。

埋土 黄褐色ローム塊をやや多く、炭化物・焼土粒を多く含み、締まりがやや弱い暗褐色土。

遺物 なし。

所見 調査区の南東、調査区東壁際に位置し1号竪穴建物および1号竪穴建物を掘り込む8号土坑のすぐ北側に、また、10号土坑の東側に隣接する。断面は浅く、扁平で、上面が大きく広がった不整逆台形状を呈する。

時期 平安時代前・中期ごろか。

13号土坑(第14図・PL.9)

位置 調査区の南東寄りに位置する。X=33477、Y=-52202~203。

重複 7号土坑に東端を掘り込まれる。

平面形状 東西にやや長い楕円形状を呈していたものと思われる。

主軸方位 N-84°-E。

規模 検出長径0.45m、短径0.45m、深さ0.19m。

埋土 黄褐色ローム塊を多く含み、締まりが強い暗灰黄色土。

遺物 埋土中より土師器甕小片2点が出土。非掲載。

所見 調査区南東寄りの中央に位置し、12号ピットの北西側に近接する。断面は浅く、扁平で、上面が大きく広がった不整逆台形状を呈する。

時期 平安時代前・中期ごろか。

14号土坑(第15図・PL.9・10)

位置 調査区の南東寄りに位置する。X=33477、Y=-52201。

重複 遺構との重複は無いが、南北両側を近・現代の耕作によって東西に溝状に破壊されている。

平面形状 北東-南西方向に長い楕円形状を呈していたものと思われる。

主軸方位 N-41°-E。

規模 検出長径0.65m、短径0.57m、深さ0.21m。

埋土 黄褐色ローム塊と炭化物を多く、焼土粒を少量含み、締まりがやや強い暗灰黄色土。

遺物 埋土中より土師器甕小片1点が出土。非掲載。

所見 調査区南東寄りの中央に位置し、7号土坑の北東側に近接する。断面は浅く、扁平で、上面が大きく広がった不整逆レンズ状を呈する。

埋土中から炭化した木材が多量に出土したが、灰や焼土の堆積は全く認められず、その場で火が使用されたわけではないようである。単に炭化物が投棄されたというような状況であった。

時期 平安時代前・中期ごろか。

15号土坑(第14図・PL.10)

位置 調査区南東寄りの中央に位置する。X=33477、Y=-52202。

重複 北側を7号土坑によって掘り込まれる。南側を近・現代の耕作によって東西に溝状に破壊されている。

平面形状 北東-南西方向に長い楕円形状を呈していたものと思われる。

主軸方位 N-25°-E。

規模 検出長径0.23m、短径0.24m、深さ0.11m。

埋土 黄褐色ローム塊を多く、焼土粒をやや多く含み締まりがやや強い暗灰黄色土。

遺物 なし。

所見 調査区南東寄りの中央に位置し、12号ピットのすぐ北側に隣接する。断面は浅く、やや扁平な逆半円形状を呈する。

時期 平安時代前・中期ごろか。

第4節 ビット

本遺跡では、北宋銭が1点出土し、中世と考えられる6号ビットを含め、26基のビットが検出された。調査区が狭小であるため、掘立柱建物の柱穴として認識出来るものは皆無であり、すべて単独のビットとして調査された。ただ、6号ビットは柱痕と考えられる土の堆積が認められ、柱穴であった可能性が高い。

ビットは土坑と同様、ほとんどのものが調査区の南東側の約2/3の範囲、Y=52220ライン以東から検出された。Y=52220ライン以西から検出されたのは1号ビット1基のみであった。

規模は概ね径0.2~0.4m前後、深さ0.2~0.4m程度で、平面形状は楕円ないし円形状である。

今回の調査においては、遺構外から出土したものを含めて、出土した土器・陶器小片の年代はほとんどのものが古代のもので、とりわけ平安時代前~中期・9~10世紀のものが多かったため、北宋銭が1点出土し、中世と考えられる6号ビット以外は、土坑と同様、概ねその時期のものとしてほぼ間違いないものと思われる。ただし、今回調査地点から検出されたビットの埋土中から出土した遺物は、土坑から出土した土器・陶器類と同様、いずれも近・現代の耕作による攪乱を受けて粉砕された小片である。また、遺物は、土坑からの出土点数よりもさらに少なく総計11点に過ぎない。ビットの底面から出土したのも皆無で、実測・図化が可能なものも皆無であった。そのため、各ビットの年代を決定する上での根拠となるようなものはないゆえに、北宋銭が1点出土し、中世のものと考えられる6号ビット以外は、土坑と同様、概ね平安時代前~中期くらいの年代幅を幅広く想定しておくのが妥当であるが、正確な年代を決定することは難しい状況であった。

ビットの埋土中に含まれるローム塊の量には多寡の差はあるものの、多くはよく類似した様相であった。

1号ビット(第16図・PL.10)

位置 調査区北西寄りに位置する。北壁に掛かる。X=33485~486、Y=52226~227。

重複 なし。

平面形状 北側大半が調査区外に出るため、不明。

主軸方位 N-9°-W。

規模 検出長径0.20m、検出短径0.30m、深さ0.07m。

埋土 黄褐色ローム塊をやや多く含み、締まりがやや弱い黒褐色土。

遺物 なし。

所見 調査区北西寄りに位置し、北壁に掛かる。本ビットより西側では、ビットは検出されなかった。また、東側も、約9.5m離れた25号ビットまでの間にビットは検出されず、恰も孤立したような状況で存在している。

比較的しっかりと掘り方を有しており、断面は逆レンズ状を呈する。

時期 不明。

2号ビット(第16図・PL.10)

位置 調査区中央からやや南東寄りの中央に位置する。X=33478、Y=52206~207。

重複 27号ビットの西辺を掘り込む。

平面形状 北東-南西方向に僅かに長い楕円形状を呈する。

主軸方位 N-17°-E。

規模 長径0.33m、短径0.31m、深さ0.31m。

埋土 黄褐色ローム塊をやや多く含み、締まりがやや強い灰黄褐色土。

遺物 なし。

所見 調査区南東寄りの中央に位置し、6号土坑の北東側に接するが、重複はしていない。深くしっかりと掘り方を有し、断面は深い不整逆台形状を呈する。

時期 不明。

3号ビット(第16図・PL.10)

位置 調査区南東寄りの南壁近くに位置する。X=33477、Y=52205~206。

重複 なし。

平面形状 北東-南西方向にやや長い楕円形状を呈する。

主軸方位 N-8°-E。

規模 長径0.28m、短径0.22m、深さ0.19m。

埋土 黄褐色ローム塊を非常に多く含み、締まりがやや強い灰黄褐色土。

遺物 なし。

第3章 検出された遺構と遺物

所見 調査区南東寄りの南壁近く、6号土坑の東側、4号ピットの南西側、10号ピットの西側に位置する。しっかりとした掘り方を有し、断面は上面がやや開いたU字状を呈する。

時期 不明。

4号ピット(第16図・PL.11)

位置 調査区南東寄りの中央、やや北壁寄りに位置する。X=33478、Y=52205。

重複 遺構との重複は無いが、北側を近・現代の耕作によって東西に溝状に破壊されている。

平面形状 北側を近・現代の耕作によって東西に溝状に破壊されているため、正確な全容は不明であるが、ほぼ円形状を呈していたものと思われる。

主軸方位 N-14°-E。

規模 検出長径0.18m、短径0.24m、深さ0.17m。

埋土 黄褐色ローム塊をやや多く含み、締まりが弱い灰黄褐色土。

遺物 なし。

所見 調査区南東寄りの中央、やや北壁寄り、3号ピットの北側、27号ピットの東側に位置する。しっかりとした掘り方を有し、断面は不整逆台形状を呈する。

時期 不明。

5号ピット(第16図・PL.11)

位置 調査区南東寄り、南壁寄りに位置する。X=33476、Y=52202。

重複 なし。

平面形状 東西に僅かに長い楕円形状を呈する。

主軸方位 N-75°-W。

規模 長径0.33m、短径0.29m、深さ0.20m。

埋土 黄褐色ローム塊をやや多く含み、締まりが弱い灰黄褐色土。

遺物 なし。

所見 調査区南東寄り、南壁寄りに位置する。12号ピットのすぐ南東側に隣接する。しっかりとした掘り方を有し、断面は逆台形状を呈する。

時期 不明。

6号ピット(第16図・PL.11・17)

位置 調査区南東寄り、南壁寄りに位置する。X=33475~476、Y=52200。

重複 遺構との重複はないが、北側を近・現代の耕作によって東西に溝状に破壊されている。

平面形状 北側を近・現代の耕作によって破壊されているため、全容は推定可能で、南北にやや長い楕円形状を呈する。

主軸方位 N-2°-E。

規模 長径0.51m、短径0.40m、深さ0.42m。

埋土 中央部に縦に柱痕と考えられる締まりが弱い灰黄褐色土が堆積し、その両側、壁際にローム塊を含む灰黄褐色土が斜めに堆積している。

遺物 埋土中より土師器甕片3点(非掲載)及び銅銭大観通宝(北宋1107年初鑄)が1点出土(第16図1・PL.11)。

所見 調査区南東寄りの南壁寄り、7号ピットのすぐ西側に隣接する。埋土の状況から柱穴と考えられ、掘立柱建物や柵列と共に構成したであろう他のピットを明確にすることは出来なかった。しっかりとした掘り方を有し、断面は逆台形状を呈する。

時期 中世か。

7号ピット(第16図・PL.12)

位置 調査区南東寄り、南壁寄りに位置する。X=33475~476、Y=52199~200。

重複 遺構との重複はないが、北側を近・現代の耕作によって東西に溝状に破壊されている。

平面形状 北東-南西方向に長い楕円形状を呈していたものと思われる。

主軸方位 N-28°-E。

規模 検出長径0.21m、短径0.26m、深さ0.08m。

埋土 黄褐色ローム塊を含み、締まりが強い灰黄褐色土。

遺物 なし。

所見 調査区南東寄りの南壁寄り、8号ピットのすぐ西側に隣接する。掘り方は浅く、断面は扁平な逆台形状を呈する。

時期 不明。

8号ピット(第16図・PL.12)

位置 調査区南東寄り、南壁寄りに位置する。X=33475、

Y=52199。

重複 遺構との重複はないが、北側を近・現代の耕作によって東西に溝状に破壊されている。

平面形状 南北にやや長い楕円形状を呈する。

主軸方位 N-18°-E。

規模 検出長径0.30m、短径0.25m、深さ0.31m。

埋土 浅黄褐色ローム塊を含み、締まりが強い灰黄褐色土。

遺物 なし。

所見 調査区南東寄りの南壁寄り、7号ビットのすぐ東側に隣接する。しっかりとした掘り方を有しており、断面は深い逆U字形を呈する。

時期 不明。

9号ビット(第17図・PL.12)

位置 調査区南東寄り、北壁寄りに位置する。X=33476、Y=52198。

重複 遺構との重複はないが、北側を近・現代の耕作によって東西に溝状に破壊されている。

平面形状 東西にやや長い楕円形状を呈する。

主軸方位 N-72°-W。

規模 検出長径0.39m、短径0.34m、深さ0.16m。

埋土 黄褐色ローム塊を多く含み、締まりが強い暗黄褐色土。

遺物 なし。

所見 調査区南東寄りの北壁寄り、6～8号ビットの北東側に位置する。比較的しっかりとした掘り方を有しており、断面は東端が一段と掘り窪められた不整逆台形状を呈する。

時期 不明。

10号ビット(第17図・PL.12・13)

位置 調査区南東寄り、南壁際に位置する。X=33476～477、Y=52204。

重複 11号ビットの南西側を掘り込む。

平面形状 ほぼ円形状を呈する。

主軸方位 N-37°-E。

規模 長径0.37m、短径0.35m、深さ0.25m。

埋土 黄褐色ローム塊を非常に多く含み、締まりがやや強い灰黄褐色土。

遺物 なし。

所見 調査区南東寄りの南壁際、3号ビットの東側、13号土坑の南西側に位置する。しっかりとした掘り方を有しており、断面は上がやや広がった深いU字形を呈する。

時期 不明。

11号ビット(第17図・PL.12・13)

位置 調査区南東寄り、南壁際に位置する。X=33477、Y=52204。

重複 10号ビットに南西側を掘り込まれる。

平面形状 ほぼ円形状を呈していたものと思われる。

主軸方位 N-45°-E。

規模 検出長径0.26m、短径0.25m、深さ0.33m。

埋土 黄褐色ローム塊を多く含み、締まりがやや強い灰黄褐色土。ローム塊の混入は10号ビットよりも少ない。

遺物 なし。

所見 調査区南東寄りの南壁際、3号ビットの東側、13号土坑の南西側に位置する。しっかりとした掘り方を有しており、断面は上がやや広がった深いU字形を呈する。

時期 不明。

12号ビット(第16図・PL.13)

位置 調査区南東寄りのやや南寄りに位置する。X=33476、Y=52202。

重複 遺構との重複はないが、北側を近・現代の耕作によって東西に溝状に破壊されている。

平面形状 東西に僅かに長い楕円形状を呈していたものと思われる。

主軸方位 N-73°-W。

規模 検出長径0.34m、検出短径0.12m、深さ0.21m。

埋土 黄褐色ローム塊を少量含み、締まりがやや強い灰黄褐色土。

遺物 埋土中より土師器甕小片が2点出土。非掲載。

所見 調査区南東寄りのやや南寄り、5号ビットの西北西側、15号土坑の南側に隣接する。しっかりとした掘り方を有しており、断面は逆台形状を呈する。

時期 不明。

13号ピット(第17図・PL.13)

位置 調査区南東端付近に位置する。X=33473~474、Y=-52193。

重複 10号土坑に北東端部を掘り込まれる。近・現代の耕作によって中央部を大きく破壊されている。

平面形状 南北に長い楕円形状を呈する。

主軸方位 N-16°-E。

規模 長径0.47m、検出短径0.25m、深さ0.10m。

埋土 浅黄褐色ローム塊をやや多く、炭化物・焼土粒を少量含み、締まりがやや強い灰黄褐色土。

遺物 なし。

所見 調査区南東端付近の中央よりやや南寄りの位置、14号ピットのすぐ西側、19号ピットのすぐ北側に隣接する。掘り方は浅く、断面は扁平な逆台形状を呈する。

時期 不明。

14号ピット(第17図・PL.13)

位置 調査区南東端付近に位置する。X=33473、Y=-52192~193。

重複 遺構との重複関係はないが、北側を近・現代の耕作によって東西に溝状に破壊されている。

平面形状 ほぼ円形状を呈していたものと思われる。

主軸方位 N-79°-W。

規模 検出長径0.22m、短径0.20m、深さ0.20m。

埋土 浅黄褐色ローム塊をやや多く含み、締まりがやや強い灰黄褐色土。

遺物 なし。

所見 調査区南東端付近の中央よりやや南寄りの位置、15号ピットのすぐ西側、20号ピットのすぐ北側、10号土坑のすぐ南側に隣接する。しっかりとした掘り方を有しており、断面はやや深い隅丸長方形形状を呈する。

時期 不明。

15号ピット(第17図・PL.13)

位置 調査区南東端付近に位置する。X=33473、Y=-52192。

重複 遺構との重複関係はないが、北側を近・現代の耕作によって東西に溝状に破壊されていわれている。

平面形状 南北にやや長い楕円形状を呈していたものと思われる。

主軸方位 N-36°-E。

規模 検出長径0.23m、短径0.20m、深さ0.20m。

埋土 浅黄褐色ローム塊を少量含み、締まりがやや強い灰黄褐色土。

遺物 なし。

所見 調査区南東端付近の中央よりやや南寄りの位置、14号ピットのすぐ東側、20号ピットの北東側、10号土坑の南側、8号土坑の西側に隣接する。しっかりとした掘り方を有しており、断面はやや深いU字形形状を呈する。

時期 不明。

16号ピット(第17図・PL.8)

位置 調査区南東端付近に位置する。南壁に掛かる。X=33473、Y=-52194。

重複 9号土坑の西端部を掘り込む。

平面形状 南側大半が調査区外に出るため全容は不明である。

主軸方位 N-17°-E。

規模 検出東西径0.24m、検出南北径0.11m、検出範囲内における最大深度0.09m。

埋土 浅黄褐色ローム塊をやや多く含み、締まりがやや強い灰黄褐色土。

遺物 なし。

所見 調査区南東端付近の南端、11号土坑のすぐ南側に隣接し、東辺が17号ピット西辺と接している。掘り方は浅く、断面は扁平な逆レンズ状を呈する。

時期 不明。

17号ピット(第17図・PL.8)

位置 調査区南東端付近に位置する。南壁際。X=33473、Y=-52194。

重複 9号土坑の西端部付近を掘り込む。

平面形状 ほぼ円形状を呈する。

主軸方位 N-15°-E。

規模 径0.15~0.16m、深さ0.13m。

埋土 浅黄褐色ローム塊をやや多く含み、締まりがやや強い灰黄褐色土。

遺物 埋土中より土師器甕小片が1点出土。非掲載。

所見 調査区南東端付近の南壁際、11号土坑のすぐ南側に隣接し、西辺が16号ピット東辺と接している。比較的

しっかりと掘り方を有しており、断面はU字形状を呈する。

時期 不明。

19号ビット(第17図・PL.13・14)

位置 調査区南東端付近、南壁寄りの位置。X=33473、Y=-52193。

重複 20号ビットに東側を掘り込まれる。

平面形状 20号ビットに東側を掘り込まれているため、全容は不明であるが、東西にやや長い楕円形状を呈していたものと思われる。

主軸方位 N-82°-W。

規模 検出長径0.19m、短径0.25m、深さ0.05m。

埋土 黄褐色ローム塊をやや多く含み、締まりがやや強い灰黄褐色土。

遺物 なし。

所見 調査区南東端付近の南壁寄りの位置、9号土坑のすぐ東側、13号ビットのすぐ南側に隣接している。掘り方は浅く、断面はごく薄く扁平な逆レンズ状を呈する。

時期 不明。

20号ビット(第17図・PL.13・14)

位置 調査区南東端付近、南壁寄りの位置。X=33473、Y=-52192~193。

重複 19号ビットの東側を掘り込む。

平面形状 南北に長い楕円形状を呈する。

主軸方位 N-8°-W。

規模 長径0.35m、短径0.25m、深さ0.12m。

埋土 黄褐色ローム塊を少量含み、締まりがやや強い灰黄褐色土。

遺物 埋土中より土師器甕小片が1点出土。非掲載。

所見 調査区南東端付近の南壁寄りの位置、8号土坑の南西側、14号ビットのすぐ南側に隣接している。掘り方は浅く、断面は逆レンズ状を呈する。

時期 不明。

21号ビット(第17図・PL.14)

位置 調査区南東端付近、中央よりやや北寄りの位置。X=33474~475、Y=-52194。

重複 遺構との重複関係はないが、北側を近・現代の耕

作によって東西に溝状に破壊されている。

平面形状 南北に長い楕円形状を呈していたものと思われるが、北側を近・現代の耕作によって破壊されているため、全容は不明である。

主軸方位 N-15°-W。

規模 検出長径0.40m、短径0.33m、深さ0.09m。

埋土 黄褐色ローム塊をやや多く含み、締まりがやや強い灰黄褐色土。

遺物 埋土中より土師器甕小片が3点出土。非掲載。

所見 調査区南東端付近の中央よりやや北寄りの位置、22号ビットのすぐ西側、23・24号ビットのすぐ東側に隣接している。掘り方は浅く、断面は逆レンズ状を呈する。

時期 不明。

22号ビット(第17図・PL.14)

位置 調査区南東端付近、中央よりやや北寄りの位置。X=33474、Y=-52194。

重複 遺構との重複関係はないが、北側を近・現代の耕作によって東西に溝状に破壊されている。

平面形状 南北に長い楕円形状を呈していたものと思われるが、北端を近・現代の耕作によって破壊されているため、全容は不明である。

主軸方位 N-3°-W。

規模 検出長径0.30m、短径0.32m、深さ0.13m。

埋土 黄褐色ローム塊を少量含み、締まりがやや強い灰黄褐色土。

遺物 なし。

所見 調査区南東端付近の中央よりやや北寄りの位置、21号ビットのすぐ東側に隣接している。掘り方は浅く、断面は逆レンズ状を呈する。

時期 不明。

23号ビット(第18図・PL.14・15)

位置 調査区南東端付近、ほぼ中央。X=33474、Y=-52194~195。

重複 24号ビットに北端を掘り込まれる。また、南側を近・現代の耕作によって東西に溝状に破壊されている。

平面形状 北東-南西方向にやや長い楕円形状を呈していたものと思われるが、北端を24号ビットに掘り込まれ、南側を近・現代の耕作によって破壊されているため、全

容は不明である。

主軸方位 N-24°-E。

規模 検出長径0.23m、短径0.27m、深さ0.06m。

埋土 黄褐色ローム塊をやや多く含み、締まりがやや強い灰黄褐色土。

遺物 埋土中より土師器甕小片が1点出土。不掲載。

所見 調査区南東端付近のほぼ中央に位置する。21号ピットのすぐ南西側に隣接している。掘り方は浅く、断面は薄い逆レンズ状を呈する。

時期 不明。

24号ピット(第18図・PL.14・15)

位置 調査区南東端付近、ほぼ中央。X=33474、Y=52195。

重複 23号ピットの北端を掘り込む。

平面形状 北東-南西方向にやや長い楕円形状を呈する。

主軸方位 N-49°-E。

規模 長径0.24m、短径0.21m、深さ0.12m。

埋土 黄褐色ローム塊を少量含み、締まりがやや強い灰黄褐色土。

遺物 なし。

所見 調査区南東端付近のほぼ中央に位置する。21号ピットのすぐ南西側に隣接している。掘り方は浅く、断面は逆レンズ状を呈する。

時期 不明。

25号ピット(第18図・PL.5)

位置 調査区の中央からやや北西寄りの位置、北壁に掛かる。X=33483、Y=52217。

重複 1号土坑の北西辺を掘り込む。

平面形状 北側が調査区外に出るが、北東-南西方向に長い楕円形状を呈するものと思われる。

主軸方位 N-71°-E。

規模 検出長径0.34m、検出短径0.26m、深さ0.13m。

埋土 黄褐色ローム塊を非常に多く含み、締まりが強い黒褐色土。

遺物 なし。

所見 調査区の中央からやや北西寄りに位置する。北壁に掛かる。比較的しっかりとした掘り方を有し、断面は逆レンズ状を呈する。

時期 不明。

26号ピット(第18図・PL.15)

位置 調査区南東端付近、南壁に掛かる。X=33472、Y=52191~192。

重複 1号竪穴建物と重複しているが、新旧関係は不明である。

平面形状 南側が調査区外に出るため、全容は不明である。

主軸方位 N-68°-W。

規模 検出長径0.43m、検出短径0.25m、深さ0.20m。

埋土 浅黄褐色ローム塊と炭化物・焼土粒を少量含み、締まりが弱い暗褐色土。

遺物 なし。

所見 調査区の南東端付近、南壁に掛かる。しっかりとした掘り方を有し、断面は底が広い長方形を呈する。

時期 不明。

27号ピット(第16図・PL.10・15)

位置 調査区中央からやや南東寄りの中央に位置する。X=33478、Y=52206。

重複 2号ピットに西側を掘り込まれる。

平面形状 西側を2号ピットに掘り込まれ、破壊されているため、全容は不明である。

主軸方位 N-18°-E。

規模 検出長径0.23m、検出短径0.22m、深さ0.39m。

埋土 黄褐色ローム塊を多く含み、締まりがやや強い灰黄褐色土。

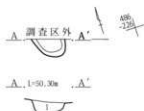
遺物 なし。

所見 調査区南東寄りの中央に位置し、5号土坑の南東側、6号土坑のすぐ北側に隣接する。深くしっかりとした掘り方を有し、断面は非常に深く狭いU字形状を呈する。

時期 不明。

第4節 ビット

1号ビット



1号ビット

1 黒褐色土(10YR3/1) 黄褐色ロームブロックをやや多く含む。締まり弱い。

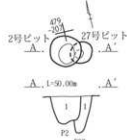
2号ビット(27号ビットを切る)

1 灰黄褐色土(10YR4/2) 黄褐色ロームブロックをやや多く含む。締まりやや強い。

27号ビット(2号ビットに切られる)

1 灰黄褐色土(10YR4/2) 黄褐色ロームブロックを多く含む。締まりやや強い。

2・27号ビット



3号ビット



3号ビット

1 灰黄褐色土(10YR4/2) 黄褐色ロームブロックを非常に多く含む。締まりやや強い。

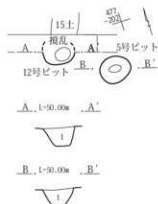
4号ビット

1 灰黄褐色土(10YR4/2) 黄褐色ロームブロックをやや多く含む。締まり弱い。

4号ビット



5・12号ビット



5号ビット

1 灰黄褐色土(10YR4/2) 黄褐色ロームブロックをやや多く含む。締まりやや強い。

12号ビット

1 灰黄褐色土(10YR4/2) 黄褐色ロームブロックを少量含む。締まり強い。

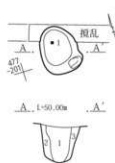
7号ビット

1 灰黄褐色土(10YR4/2) 黄褐色ロームブロックを多く含む。締まり強い。

8号ビット

1 灰黄褐色土(10YR4/2) 浅黄褐色ロームブロック(10YR8/3)を多く含む。締まり強い。

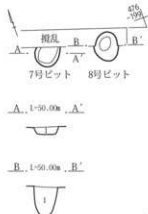
6号ビット



6号ビット

- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 締まり弱い。大塚遺宝出土。柱痕。
- 2 灰黄褐色土と浅黄褐色ロームブロックの混土。締まり強い。
- 3 灰黄褐色土 浅黄褐色ロームブロックを多く含む。締まりやや強い。

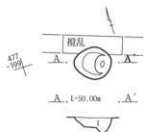
7・8号ビット



第16図 1～8・12・27号ビット

第3章 検出された遺構と遺物

9号ビット



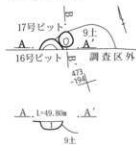
9号ビット

- 1 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 黄褐色ロームブロックを多く含む。締まり強い。

10号ビット(11号ビットを切る)

- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 黄褐色ロームブロック(10YR5/6)を非常に多く含む。締まりやや強い。

16・17号ビット



16号ビット(9号土坑と重複、先後不明)

- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 浅黄褐色ロームブロックを少量含む。締まりやや強い。

21号ビット

- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 黄褐色ロームブロックをやや多く含む。締まりやや強い。

22号ビット

- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 黄褐色ロームブロックを少量含む。締まりやや強い。

10・11号ビット



13号ビットA-A'

- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 浅黄褐色ロームブロックをやや多く含む。炭化物、焼土粒を少量含む。締まりやや強い。

13号ビットB-B'

- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 浅黄褐色ロームブロックをやや多く含む。炭化物、焼土粒を少量含む。締まり弱い。

14号ビット

- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 浅黄褐色ロームブロックをやや多く含む。締まりやや強い。

15号ビット

- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 浅黄褐色ロームブロックを少量含む。締まりやや強い。

19号ビット(20号ビットに切られる)

- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 黄褐色ロームブロックをやや多く含む。締まりやや強い。

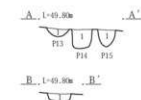
20号ビット(19号ビットを切る)

- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 黄褐色ロームブロックを少量含む。締まりやや強い。

21・22号ビット



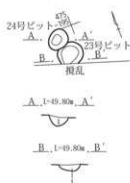
13~15号ビット



0 1:40 1m

第17図 9～11・13～17・19～22号ビット

23・24号ピット



23号ピット

1 灰黄褐色土(10YR4/2) 黄褐色ロームブロックをやや多く含む。締まりやや強い。

24号ピット

1 灰黄褐色土(10YR4/2) 黄褐色ロームブロックを少量含む。締まりやや強い。

25号ピット(1号土坑を切る)

1 灰黄褐色土(10YR4/2) 黄褐色ロームブロックをやや多く含む。締まり弱い。

25号ピット



26号ピット



26号ピット(1号住居内)

1 暗褐色土(7.5YR3/1) 浅黄褐色ロームブロックを少量含む。炭化物、焼土粒を少量含む。締まり強い。



第18図 23～26号ピット

第5節 遺構外出土遺物・非掲載出土遺物(第19図・PL.17)

本遺跡では、遺構外から88点の土器・陶器片と2点の石製品が出土しているが、先述したように、調査範囲内は耕作機械によって深くまで掘り返され、攪拌された耕作土の中に粉碎された土器片が含まれており、出土した遺物の量は非常に少なく、また、遺物が出土した事例であっても、いずれも小破片であったため、実測に堪えるような土器・陶器片はほぼ皆無と言って良い状態であった。

遺構外から出土した遺物では、弥生時代後期の土器片1点(1)を探り上げた。

1は、弥生時代後期の甕胴部小片で、胎土は、やや円磨度の進んだ少量の灰色・赤色・黒色岩片や長石・石英・角閃石の粗・細砂を含み緻密。表面は相互に2～3mmの間隔を置いてLR縄文を斜位に施文し、内面は横磨きである。

非掲載遺物は、各遺構の記述の中でもそれぞれ触れたところであるが、遺構ごとの出土点数は第5表に纏めた。

遺構外から出土した遺物で非掲載のものは、縄文時代前期前半の土器片が2点、弥生時代後期の土器片が2点、古墳時代後期～平安時代の土師器杯・椀類片が8点、土

師器甕片が66点、須恵器杯・椀片が5点、須恵器甕片が3点、中世焼締陶器片及び近世施釉陶器片が各1点であり、古代の施釉陶器片の出土は1点もなかった。また、6号土坑付近の遺構外からも二次加工がある粘板岩の剥片が1点出土しているほか、遺構外出土遺物として黒色頁岩の剥片が1点出土している。

竪穴建物は隅部のごく一部が検出されたに過ぎないものの、出土した土器片が各十数点ずつと、出土が比較的多いのはある意味当然のことであろう。溝・土坑・ピットからは、調査区中央部から検出された3号土坑からの出土が16点であったほかは、ほぼ5点以下程度で、僅か1・2点というケースがほとんどである。ピットに関しては遺物が全く出土していないものが約7割強であった。



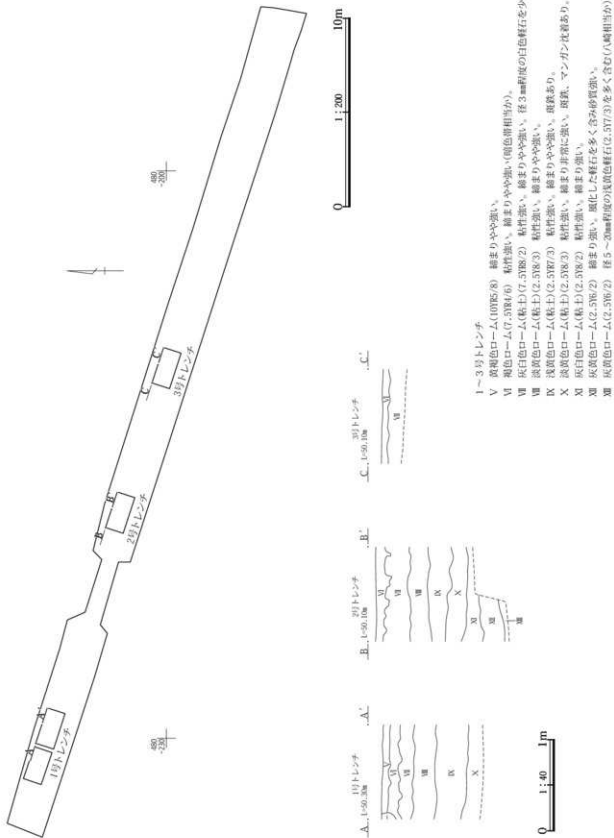
第19図 遺構外出土遺物

第6節 旧石器確認調査(第20図・PL.16)

本遺跡ではローム層の堆積が認められたので、すべての遺構の調査を終了した後、旧石器時代の遺物の包蔵の有無を確認するために、ローム層の堆積状態が安定して良好である調査区の西半部3箇所において、トレンチを設定し、調査を行った。1号トレンチのみ東西両側に2箇所に分割して掘削し、2・3号トレンチの倍の面積を調査したが、各トレンチ個々の大きさは縦1m、横2mで設定し、1号トレンチでは遺構確認面からさらに1.05m、2号トレンチでは1.45m、3号トレンチでは0.25mまで掘り下げた。

遺構確認面であるIV層：明黄褐色ローム層とV層：黄褐色ローム層の下には、VI層：暗色帯相当の褐色ローム層が約5～15cm程度、その下層にはVII層：灰白色ローム粘土層が約12～30cm程度、その下層にはVIII層：淡黄色ローム粘土層が約18～25cm程度、その下層にはIX層：浅黄色ローム粘土層が約15～35cm程度、その下層にはX層：淡黄色ローム粘土層が約20cm程度、その下層にはXI層：灰白色ローム粘土層が約20cm程度、その下層にはXII層：灰黄色ローム砂質層が約20～25cm程度、さらにその下層にはXIII層：八崎軽石層(Hr-HP)相当のXIV層：灰黄色ローム砂質層が堆積している状況であった。なお、XI層以下は2号トレンチのみでの検出であった。

石器の出土は全く見られなかった。



第20図 旧石器確認調査トレンチ位置図、土層断面図

第4章 調査成果の整理とまとめ

古墳時代前期から平安時代中期に至る集落、古墳時代後期の古墳群、中世方形居館の掘割や区画溝等が広範囲にわたって検出されている下湖名遺跡群は、南北約2.5km・東西約1kmに及ぶ広大な遺跡であるが、今回調査の対象となったのは、わずかに長さ約50m・幅約4m・面積196㎡のごく狭小な範囲が対象であった。しかも、農業機械を使用した近・現代の耕作によって、深く、細長く、溝状に地中深くまで掘り返されており、その耕作溝の間隔に僅かに遺された遺構を検出、調査するような状況であった。上面を大きく削平されており遺構の検出状態は非常に悪かった。掘り込みが浅い遺構などは完全に破壊され、失われてしまったものが存在する可能性が高い。しかしながら、ごく限られた僅かな範囲における調査とはいえ、今回調査地点の周辺においてこれまででも多く検出されてきた古代集落に繋がる遺構群であることを明らかにすることが出来た。

調査範囲内では、遺構は南東側約半分に比較的濃密に分布している。調査区南東寄りから検出された北宋銭大観通宝(1107年初鑄)が出土した6号ピットは中世のものである可能性が高いものの、それ以外の溝、土坑、ピットから出土した遺物の量は非常に少なく、いずれも実測に堪えない小片ばかりであったため、多くの遺構の正確な年代は不明確である。しかしながら、今回の調査において出土した土器・陶器類は、遺構外出土のものを含めて、概ね平安時代前・中期9～10世紀くらいのものであったので、遺構の年代も、概ねその時期のものと同推測できよう。

竪穴建物 今回の調査で検出された竪穴建物はわずか2棟で、しかも調査区東西両側から、建物の隅や端のごく一部がわずかに検出されたに過ぎなかった。調査範囲からは、竈や柱穴・貯蔵穴等も一切検出されなかったが、調査区南東寄りの中央で検出された7号土坑の埋土中からは、被熱した痕跡を有する角閃石安山岩の自然礫が出土しており、竪穴建物の竈の構築材として用いられていたものであった可能性が高い。周辺における調査事例と

同様、今回の調査地点付近においても竈を有する竪穴建物が明らかに存在していたことの証左となろう。

2棟の竪穴建物は、近・現代の耕作によって甚だしく破壊されており、検出されたのは竪穴建物の掘り方の残骸の断片と言っても良いような状況で、形状及び土層断面の状況から竪穴建物の一部と判断されたという程度であった。

出土した遺物は、先述した通り、いずれも小片で、実測図化し得ないようなものばかりであったが、2棟とも平安時代前・中期9～10世紀ごろのものと考えられる土師器・須恵器片であるので、その時期のものと考えられる。

溝 調査区において検出された溝は、調査区西寄りの位置において、北東-南西方向の小規模なものが1条のみ検出された。しかも調査区の中央で止まっており、流水等の痕跡も認められなかった。

調査区周辺からは、中世方形居館の大規模な掘割や、居館内外の地割を示す大小の区画溝、用・排水路と見られる溝等が数多く検出されていることから見れば、僅か200㎡弱の狭小な範囲における調査とはいえ、溝は1条のみ、それもごく小規模なものしか検出されなかったことは意外ともいえる。

土坑 今回の調査では15基の土坑が検出された。土坑は調査区の南東側の約2/3の範囲から検出された。調査区北西側約1/3の範囲において検出されなかった理由については、今回の調査では明らかにしなかった。

検出された土坑は、概ね、長さ0.6～1m前後・短径0.4～1m前後・深さ0.06～0.6m程度という規模であり、楕円形状を呈しているものがほとんどである。それらの多くは、竪穴建物や溝、ピット等と同様に、近・現代の耕作によって破壊されており、部分的にしか検出出来なかったものが多い。

また、先述したように、出土遺物が極めて少量であり、しかも、近・現代の耕作によってほとんど粉砕された

いってもよいような状態の小片ばかりで、各土坑の年代をあまり明確にはしえなかったが、今回の調査においては、遺構外から出土したものを含めて、出土した土器・陶器小片の年代はほとんどのものが古代のもので、とりわけ平安時代前～中期・9～10世紀のものが多かったため、概ねその時期のものと見てほぼ間違いないように思われる。

今回の調査で検出された土坑には、埋土中から自然礫が出土したものがいくつか存在していた。特に6号土坑の埋土中に多く含まれた粘板岩やチャートは、本遺跡周辺地域からは産出しない石材であり、他所からもたらされたものと考えられる。当該期のこの地域における石材流通ルートや、石製品の加工・製作工房の存在などを考える上での材料となり得るであろう。

また、15号土坑からは多くの炭化材が出土したが、焼土や灰は検出されなかったため、他の場所で焼かれ炭化した材のみが廃棄されたものと考えられる。

なお、今回の調査において検出された土坑やピットの中には、周辺における調査事例の状況を勘案すると、竪穴建物の柱穴や貯蔵穴・床下土坑であったものが存在していた可能性が十分に考えられる。しかしながら、調査範囲が限られ、また、遺構の残存状態も極めて良くない状態であり、しかも出土遺物もほとんどないと言って良いような状態であったため、そのことを明確にすることは出来なかった。しかしながら、今回の調査において検出された土坑・ピットの性格や特質の一つとして、そうした要素を考慮しておく必要があるだろう。

ピット 今回の調査では、北宋銭が出土し、中世のものと考えられる6号ピットを含め、26基のピットが検出された。

ピットという遺構の性格上、当然、掘立柱建物・竪穴建物・柵などの柱穴である可能性は常に想定できるところではあるが、調査区が狭小であるため、建物を構成する柱穴として認識出来るものは皆無であった。ただ、6号ピットは柱痕と考えられる土の堆積が明瞭に認められ、なんらかの建造物の柱穴であった可能性が非常に高い。

また、土坑と同様、近・現代の耕作によって大きく破壊されたものや、部分的にしか検出できなかったものが

多かった点も、ピットの性格を明確にしえなかった大きな理由の一つであった。

ピットは、土坑と同様、ほとんどのものが調査区の南東側の約2/3の範囲から検出されており、調査区南西寄りから検出されたのは1号ピット1基のみであった。

規模は概ね径0.2～0.4m前後、深さ0.2～0.4m程度で、平面形状は楕円ないし円形状である。

北宋銭が1点出土し、中世のものと考えられる6号ピット以外は、埋土の状況も土坑とよく類似しているもので、土坑と同様、概ね古代のものとするのが妥当なであろうが、今回の調査で検出されたピットから出土した土器・陶器類は、土坑出土のものと同様、近・現代の耕作による攪乱を受けて粉砕された小片ばかりである上に、1点の小片すら出土していないものが殆どで、各ピットの年代を決定する上での根拠となるようなものはないゆえに、北宋銭が出土し、中世のものと考えられる6号ピット以外は、正確な年代を決定することが難しい状況であった。

まとめ 今回、検出された遺構の多くが概ね古代のものと見られることから、今回の調査成果についても、狭小な範囲ではあるものの、律令制下の上野国佐位郡調名郷の一面を構成した集落の一部と位置付けることが可能である。

周辺における古代の遺構の調査事例と併せて、この地域における古代地域史解明に向けての材料を、また一つ、加えることができたこと意義付けることができる。

遺物観察表

第4表 遺物観察表

6号土坑出土遺物										
種別 PL.No.	No.	種類	出土位置 破片率	計測値			胎土/焼成色/調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第1208 PL.17	1	石製品 二次加工 ある割片	理土上層 完形	長 幅	14.4 10.3	厚 重	3.0 454.4	粘板岩	薄い層状構造が発達した石質である。大形割片を素材として縁辺部に二次加工痕が散在する。打製石片あるいは石製の加工途上のものあるいはその破損品の可能性がある。	
第1208 PL.17	2	石製品 石製?	理土上層 1/2	長 幅	(18.2) (16.2)	厚 重	1.9 507.8	粘板岩	薄い層状構造が発達した石質であり、割離面の特徴を観察することが難しい。右側辺の一部の割離面は二次加工痕と判断した。二次加工痕は表面側への片面加工である。形態的特徴から石製の可能性がある。	
第1208 PL.17	3	石製品 二次加工 ある割片	理土上層 完形	長 幅	26.2 25.3	厚 重	5.5 3327.5	粘板岩	薄い層状構造が発達した石質である。大形割片を素材として縁辺部に二次加工痕が散在する。打製石片あるいは石製の生産途上の資料である可能性がある。	
第1208 PL.17	4	石製品 二次加工 ある割片	理土上層 完形	長 幅	21.2 9.8	厚 重	2.3 542.3	粘板岩	薄い層状構造が発達した石質である。大形割片を素材として縁辺部に二次加工痕が散在する。打製石片あるいは石製の両加工品の可能性がある。両側辺の中央にはつづれ痕が認められこの形態で機能した可能性も想定される。	
第1208 PL.17	5	石製品 磨石	理土下層 完形	長 幅	15.5 7.0	厚 重	5.0 765.5	砂岩	表裏面と左側面に磨面が認められる。左右両側面と下端面には鋭打痕が集中する。	
第1308 PL.18	6	石製品 二次加工 ある割片	理土上層 完形	長 幅	11.3 18.0	厚 重	5.0 828.7	粘板岩	薄い層状構造が発達した石質である。大形割片を素材として縁辺部に二次加工痕が散在する。あるいは石製の加工途上のものあるいはその破損品の可能性がある。	
第1308 PL.18	7	石製品 二次加工 ある割片	理土上層 不明	長 幅	12.4 (12.5)	厚 重	2.6 335.5	粘板岩	薄い層状構造が発達した石質である。大形割片を素材として下無縁の背面両面に二次加工痕が認められる。打製石片あるいは石製の加工途上のものあるいはその破損品の可能性がある。	
6号ピット出土遺物										
第1608 PL.18	1	銭貨 銅銭 大銭通寶	理土上層 一部欠損	縦 横	2.473 2.393	厚 重	0.167 1.9	銅	全体に劣化が激しくもろい。面、背ともに彫は深く、字、輪郭ともに明瞭。	
遺構外出土遺物										
第1908 PL.18	1	弥生土器 甕	割部破片					やや円磨度の進んだ少量の灰色・赤色・黒色岩片や長石・石英・角閃石の粒・細砂を含む緻密な胎土。	相互に2~3mmの間隔を置いては縄文を斜位に施文。内面横位磨き。	弥生中前期

第5表 非掲載遺物一覧表

遺構名	縄文時代 前期前半 土器	弥生時代 前期土器	土師器				須恵器				中世 破鉢陶器	近世 備前陶器	土器・陶器計		石製品				
			杯・碗	甕	杯・碗	甕	杯・碗	甕	杯・碗	甕			破片数	重量計g	点数	重量g			
1号竪穴建物			破片数	破片数	破片数	重量g	破片数	重量g	破片数	重量g	破片数	重量g	破片数	重量計g	点数	重量g			
2号竪穴建物																			
1号土坑			1	4	14	69			2	13	1	13		18		99			
2号土坑															13		76		
3号土坑															2		7		
4号土坑															2		17		
5号土坑															17		79		
6号土坑															8		12		
7号土坑															4		46		
8号土坑			3	7	3	44									6	51	1	453.3	
9号土坑															3		90		
10号土坑															5		21		
11号土坑															9		33		
12号土坑															2		13		
13号土坑															2		7		
14号土坑															1		3		
6号ピット															3		38		
12号ピット															3		38		
17号ピット															2		12		
20号ピット															1		2		
21号ピット															1		8		
23号ピット															3		9		
遺構外			2	2	8	30	66	338	5	17	3	35	1	1	88	420	1	313.8	
計			2	2	13	42	155	861	11	40	6	102	1	1	191	1045	2	767.1	

報告書抄録

書名ふりがな	しもふちないせき
書名	下洞名遺跡
副書名	社会資本総合整備(防災・安全)(一)伊勢崎新田上江田線(大國神社東交差点)交差点改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	—
シリーズ名	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	645
編著者名	高島英之・大西雅広
編集機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	2018
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北碓町下箱田784-2
遺跡名ふりがな	しもふちないせき
遺跡名	下洞名遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんいせきさきさかいしもふちなあざつかごし
遺跡所在地	群馬県伊勢崎市境下洞名字塚越3047-1
市町村コード	204
遺跡番号	SA036
北緯(世界測地系)	36.300361
東経(世界測地系)	139.251694
調査期間	20170601-20170630
調査面積	196.00
調査原因	道路建設
種別	散布地、集落
主な時代	奈良/平安/中世/
遺跡概要	古代集落—竪穴建物2—土器+石製品/中世—ピット1—銅銭/時期不明—溝1+土坑15+ピット26—土器+陶磁器+石製品+金属製品+銅銭
特記事項	古代の上野国佐位郡淵名郷の一面に当たる集落の一部を調査。
要約	古代の上野国佐位郡淵名郷、中世の淵名荘の一面に当たる地域にあたり、周辺では古墳群や古墳前期～古代の集落、中世方形居館の掘割や区画溝などが多数検出されている。今回の調査では、古代集落の一部が検出されたが、道路拡張幅の狭い範囲内での調査であるため、2棟検出された古代の竪穴建物も竪穴の隅部のごく一部が検出されたに過ぎない。北宋銭が出土したピット1基以外の遺構からは古代の土器類が出土し、当該期の遺構と推測出来るが、出土遺物はいずれも小片で、ごく少量に過ぎないため、遺構の正確な年代を確定するには至らなかった。遺構・遺物は、後世の耕作によって削平、破壊されており、検出状況は良くなかった。

写真図版



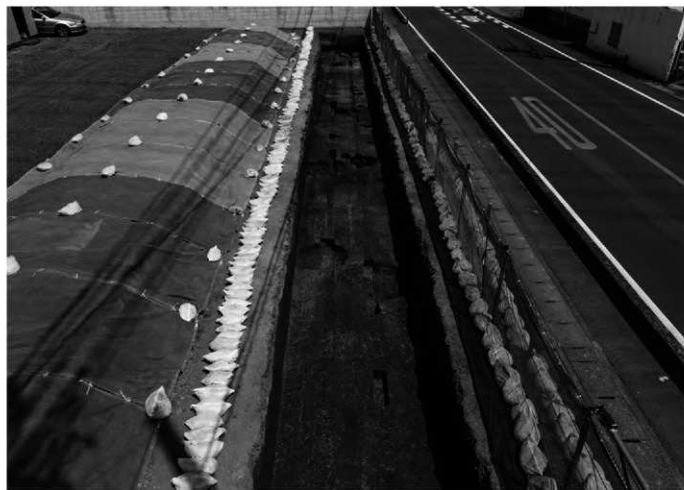
1. 一般県道伊勢崎新田上江田線大國神社東交差点の現況(東より)



2. 調査区全景(北より)



1. 調査区全景(西より)



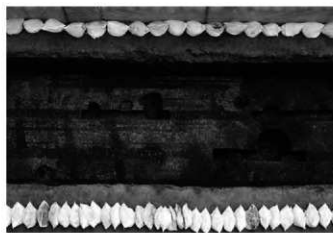
2. 調査区東半部道構検出状況(西より)



1. 調査区西半部遺構検出状況(東より)



2. 調査区東端部遺構検出状況(北より)



3. 調査区東半部遺構検出状況(北より)



4. 調査区中央部遺構検出状況(北より)



5. 調査区西端部遺構検出状況(北より)



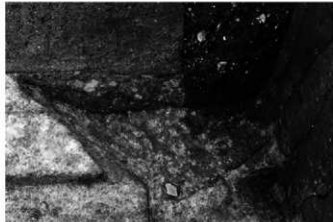
1. 1号竪穴建物全景(西より)



2. 1号竪穴建物全景(北西より)



3. 1号竪穴建物土層断面A-A'(西より)



4. 2号竪穴建物全景(北より)



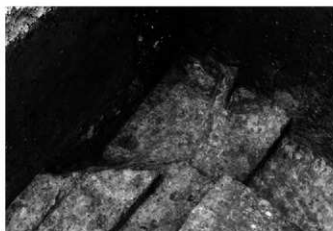
5. 2号竪穴建物全景(西より)



6. 2号竪穴建物土層断面A-A'(北より)



7. 2号竪穴建物土層断面B-B'(東より)



8. 2号竪穴建物掘り方全景(北東より)



1. 2号竪穴建物掘り方全景(西より)



2. 1号溝全景(北より)



3. 1号溝全景(西より)



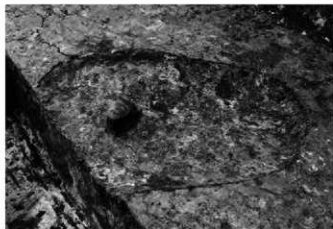
4. 1号溝土層断面A-A'(北より)



5. 1号土坑、25号ピット全景(西より)



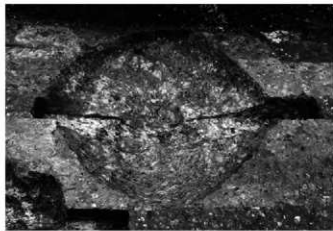
6. 1号土坑、25号ピット土層断面A-A'(南西より)



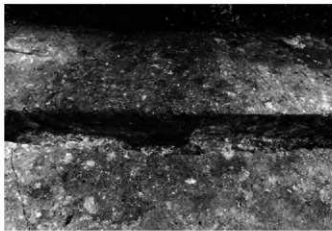
7. 2号土坑全景(北西より)



8. 2号土坑土層断面A-A'(北東より)



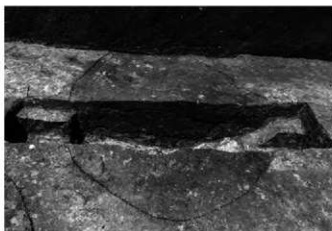
1. 3号土坑全景(北より)



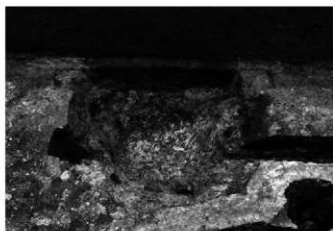
2. 3号土坑土層断面A-A'(北より)



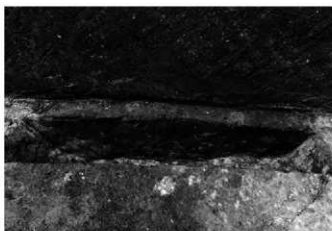
3. 4号土坑全景(南より)



4. 4号土坑土層断面A-A'(南より)



5. 5号土坑全景(南より)



6. 5号土坑土層断面A-A'(南より)



7. 5・6号土坑全景(西より)



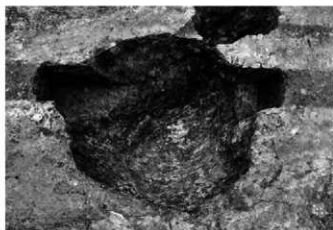
8. 6号土坑全景(北より)



1. 6号土坑石製品等出土状況1(北西より)



2. 6号土坑石製品等出土状況2(南より)



3. 6号土坑掘り方全景(南より)



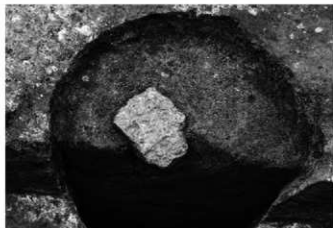
4. 6号土坑土層断面A-A'(北より)



5. 7号土坑全景(北より)



6. 7号土坑土層断面A-A'(北より)



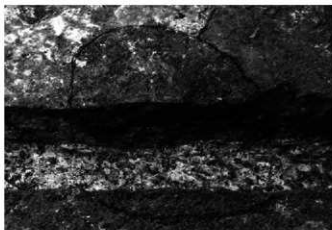
7. 7号土坑角閃石安山岩礫出土状況(北より)



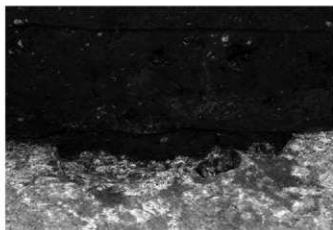
8. 7号土坑出土角閃石安山岩礫



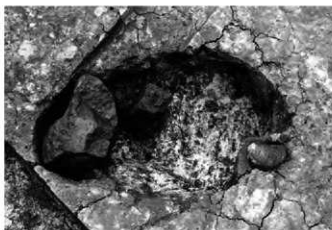
1. 8号土坑全景(西より)



2. 8号土坑土層断面A-A'(南より)



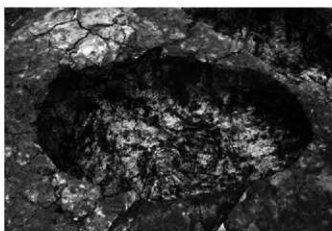
3. 9号土坑全景・土層断面A-A'・16・17号ピット全景(北より)



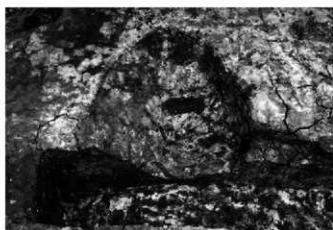
4. 10号土坑全景(南東より)



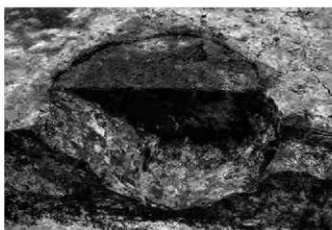
5. 10号土坑土層断面A-A'(北東より)



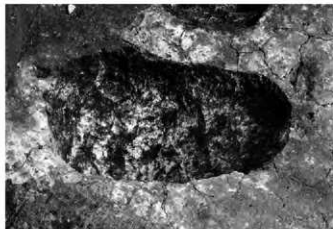
6. 10号土坑掘り方全景(北西より)



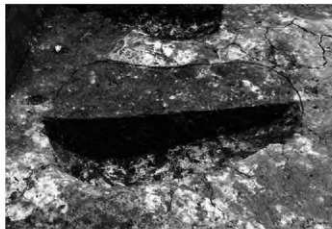
7. 11号土坑全景(北より)



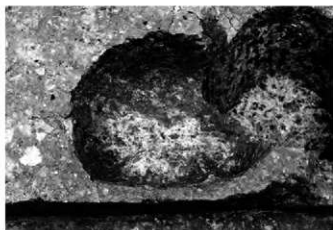
8. 11号土坑土層断面A-A'(北より)



1. 12号土坑全景(北西より)



2. 12号土坑土層断面A-A'(北より)



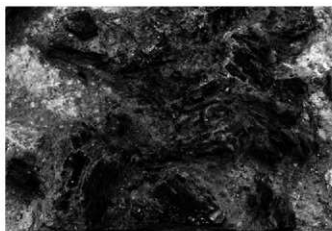
3. 13号土坑全景(南より)



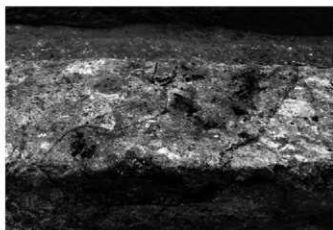
4. 13号土坑土層断面B-B'(北西より)



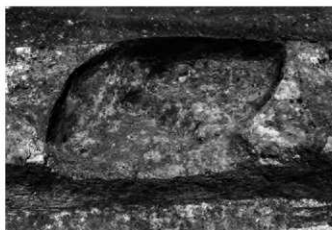
5. 14号土坑全景・炭化材出土状況(南より)



6. 14号土坑炭化材出土状況(南より)



7. 14号土坑土層断面A-A'(南より)



8. 14号土坑掘り方全景(南より)



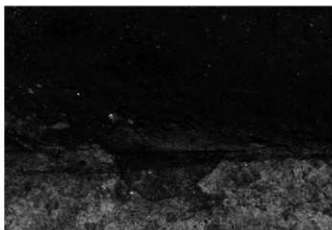
1. 15号土坑全景(南より)



2. 14・15号土坑土層断面A-A'(南東より)



3. 1号ピット全景・土層断面A-A'(南より)



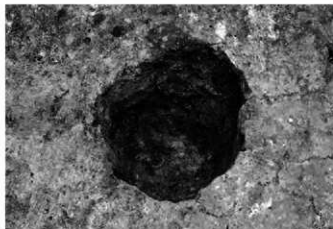
4. 1号ピット検出状況(南より)



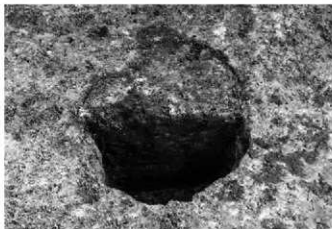
5. 2・27号ピット全景(北より)



6. 2号ピット土層断面A-A'(北より)



7. 3号ピット全景(北より)



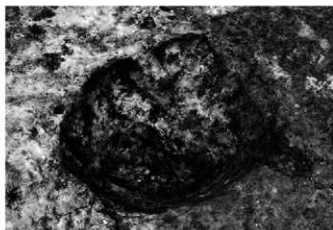
8. 3号ピット土層断面A-A'(北より)



1. 4号ピット全景(北より)



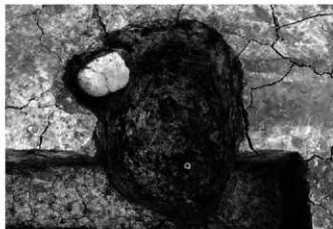
2. 4号ピット土層断面A-A'(北より)



3. 5号ピット全景(北より)



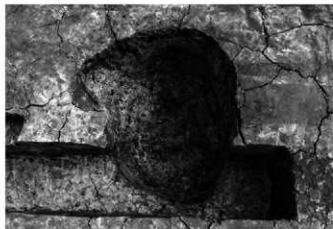
4. 5号ピット土層断面B-B'(北より)



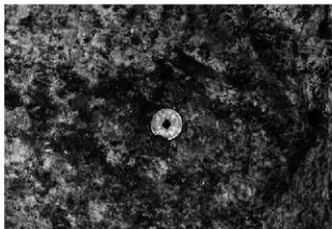
5. 6号ピット全景(北より)



6. 6号ピット土層断面A-A'(北より)



7. 6号ピット掘り方全景(北より)



8. 6号ピット銅銭出土状況(北より)



1. 7号ピット全景(北より)



2. 7号ピット土層断面A-A'(北より)



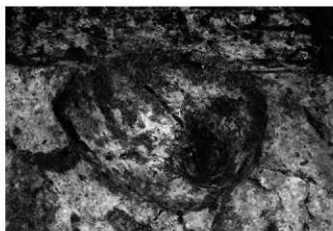
3. 7・8号ピット全景(北より)



4. 8号ピット全景(北より)



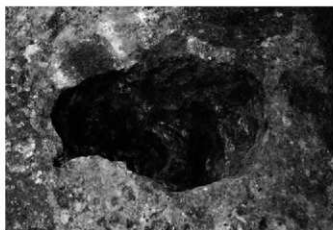
5. 8号ピット土層断面B-B'(北より)



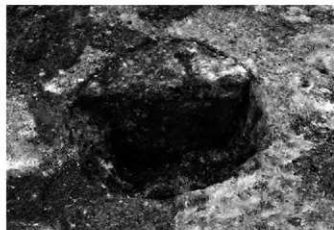
6. 9号ピット全景(南より)



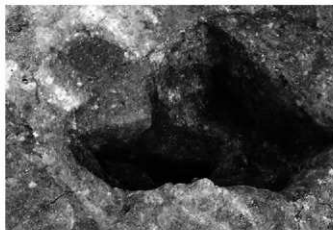
7. 9号ピット土層断面A-A'(南より)



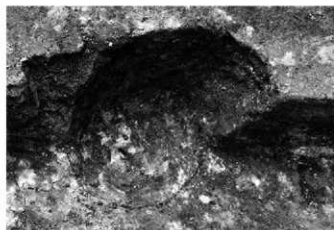
8. 10・11号ピット全景(北西より)



1. 10号ピット土層断面A-A'(南より)



2. 10・11号ピット土層断面B-B'(西より)



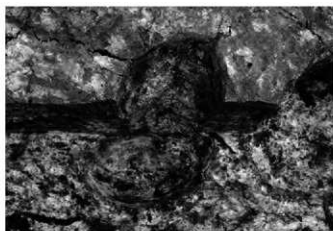
3. 12号ピット全景(北より)



4. 13～15・19・20号ピット全景(北より)



5. 13号ピット北側部分全景(南より)



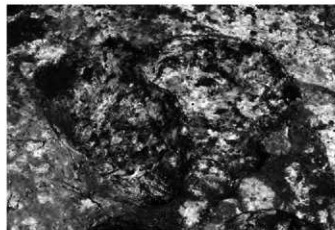
6. 15号ピット全景(北より)



7. 13～15号ピット土層断面A-A'(北より)



8. 13号ピット北側部分土層断面B-B'(南より)



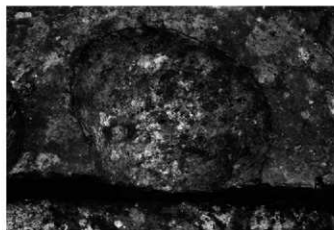
1. 19・20号ピット全景(北より)



2. 19・20号ピット土層断面A-A'(北より)



3. 21・22号ピット全景(北より)



4. 21号ピット全景(北より)



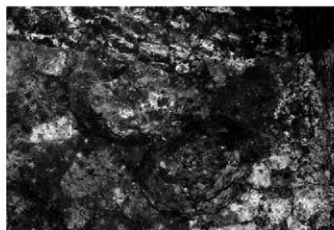
5. 21号ピット土層断面A-A'(北より)



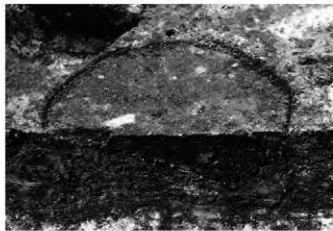
6. 22号ピット全景(北より)



7. 22号ピット土層断面B-B'(北より)



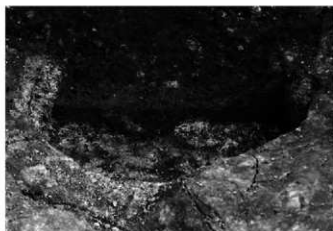
8. 23・24号ピット全景(北より)



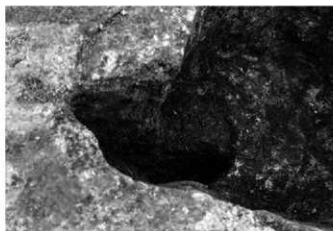
1. 23号ピット土層断面B-B'(南より)



2. 24号ピット土層断面A-A'(南より)



3. 26号ピット全景・土層断面A-A'(北より)



4. 27号ピット土層断面A-A'(北より)



5. 調査区西壁土層断面A-A'(東より)



1. 旧石器確認調査1号トレンチ全景(東より)



2. 旧石器確認調査1号トレンチ東側全景(南より)



3. 旧石器確認調査1号トレンチ西側全景(南より)



4. 旧石器確認調査1号トレンチ東側土層断面A-A'(南より)



5. 旧石器確認調査2号トレンチ全景(東より)



6. 旧石器確認調査2号トレンチ土層断面B-B'(南より)



7. 旧石器確認調査3号トレンチ全景(東より)



8. 旧石器確認調査3号トレンチ土層断面C-C'(南より)

6号土坑出土遺物



1



2



3



4



5



6



7

6号ピット出土遺物



1

遺構外出土遺物



1

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第645集

下湫名遺跡

社会資本総合整備(防災・安全)C-1伊勢崎新田上江田線(大國神社東交差点)
交差点改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成30(2018)年10月1日 印刷

平成30(2018)年10月4日 発行

編集・発行/公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8535 群馬県渋川市北楯町下箱田784番地2

電話(0279)52-2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷/川島美術印刷株式会社

付図 下湊名遺跡 一般県道伊勢崎新田上江田線(大國神社東交差点)
交差点改良事業に伴う発掘調査区全体図

